



Title	デンマーク語心態詞の研究
Author(s)	大辺, 理恵; 新谷, 俊裕; Paludan, Martin Müller
Citation	IDUN –北欧研究–. 2015, 21, p. 97-160
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/95512">https://doi.org/10.18910/95512</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# デンマーク語心態詞の研究

大辺 理恵・新谷 俊裕・Martin Paludan-Müller

## I. デンマーク語心態詞：概説（大辺 理恵）

### 1. はじめに

わが国におけるデンマーク語学研究では、新谷（2001）、新谷（2007）の中でデンマーク語 *ellers* および *altså* の「心態詞的用法」について取り上げられ、そこで初めてわが国のデンマーク語研究者あるいは学習者に「デンマーク語心態詞の存在」が紹介され、また「その意味記述の必要性」が指摘された。さらに、新谷・Pedersen・大辺（2014: 266-270）の中では、「心態詞」は「話し手の発話する文の内容に関する話し手の心的態度を表す」ものとして説明され、デンマーク語学習者にとって「心態詞」の存在を知っておく必要性が再度示された。

本章ではまずデンマークにおいて、デンマーク語心態詞の研究がどのように行なわれてきたのかについて概観し、次にデンマーク語心態詞を指すデンマーク語の名称およびその定義について言及した後に、*sgu*, *jo*, *skam*, *da*, *nu*, *nok*, *vel*, *vist*, *altså*, *ellers*, *dog* の順に各語の心態詞としての意味について例文を用いながら概観する。

### 2. デンマーク語心態詞に関する先行研究

#### 2.1. デンマーク語心態詞をめぐる議論の変遷

デンマーク語の心態詞をめぐる議論は、ここ 40 年をかけて徐々に進んできたと言える。現代デンマーク語における心態詞について、その意味記述の困難さを最初に取り上げた論文に Harder (1975) が挙げられる。Harder (1975) は *da*, *jo*, *sgu*, *skam* の意味が、従来文副詞として扱われてきた *ikke* や *straks* とは異なる機能を持つことに触れ、その意味・機能の在り方および意味記述の必要性に注意を向けた。その後 Andersen (1982) において、*da*, *nu*, *ellers*, *altså*, *også* の心態詞としての意味について詳細な説明が試みられた。さらに Davidsen-Nielsen (1993) が、*da*, *dog*, *jo*, *nok*, *nu*, *sgu*, *skam*, *vel*, *vist* を取り上げ、英語学者である著者の観点に立脚してこれらの語の心態詞としての意味についての説明を試みた。さらにその後 Jensen (2000) が自身の ph.d.論文において、*sådan*, *altså*, *ellers*, *dog*, *vist*, *nok* を取り上げ、各語に存在する複数の意味、多義性が通時的にどのように獲得されてきたかという点に着目し、各語の心

態詞としての意味は、各語の意味の発展上後期になって使われ出したものであることを述べた。そして Hansen og Heltoft (2011) (以降、GDS と略す) は、上述の先行研究における議論を参考にしながら、フランス人言語学者 Ducrot によるポリフォニー理論も取り入れつつ, altså, bare, blot, da, dog, ellers, jo, mon, monstro, måske, nok, nu, sgu, skam, vel, vist の心態詞としての意味の説明を提示した。

## 2.2. デンマーク語心態詞：småord, modalpartikler, dialogiske partikler ...?

従来デンマーク語の心態詞は、småord という名称で呼ばれてきた。それは実際にデンマーク語の心態詞が, jo, da, nu, nok, vel, vist など単音節からなる語から形成される語のグループであったためである。<sup>1</sup> その後デンマーク国内で心態詞の研究が進むにつれ, småord と並行して, modalpartikler という名称が用いられるようになる。<sup>2</sup> これは心態詞の持つ「話し手の発話する文の内容に関する話し手の心的態度を表す」という機能に着目した名称であると言える。また GDS では新たに, dialogiske partikler という名称が用いられている。GDS にはなぜこの新たな名称を用いたのかという理由は明確には示されていないが, dialogisk <談話的> という形容詞の意味を踏まえると, 心態詞の多くが談話・会話内で頻繁に用いられ, 談話・会話に参加するものの心的態度を表すという機能に着目した名称であると推察できる。

## 2.3. デンマーク語心態詞の定義

デンマーク語心態詞の意味上の特徴は、先にも述べたとおり、「話し手の発話する文の内容に関する話し手の心的態度を表す」であると考えられる。この意味上の特徴から、当然の帰結ではあるが、心態詞が用いられるのは主に話し言葉であることも指摘されている。<sup>3</sup> さらにその統語的特徴としては「中域にしか現れない」ことが指摘されている。<sup>4</sup> また, Davidsen-Nielsen (1993: 2) では「強強勢は置かれない」という特徴が指摘されているが, GDS ではこの強勢上の特徴については取り立てて言及はされていない。

また心態詞とされる語は同時に、心態詞としての意味とは別の意味・機能を持ち、多義的であることも多いことが指摘されている。<sup>5</sup>

<sup>1</sup> Harder (1975: 106), Davidsen-Nielsen (1993: 2), GDS (2011: 1046).

<sup>2</sup> Harder (1975), Andersen (1982), Jensen (2000).

<sup>3</sup> Andersen (1982: 86), Davidsen-Nielsen (1993: 2).

<sup>4</sup> Harder (1975: 106), Andersen (1982: 86), GDS (2011: 1039). また中域内の副詞の語順については, Hansen & Heltoft (2011: 1038), 新谷 (2001), (2007) を参照.

<sup>5</sup> Andersen (1982: 86-87), Jensen (2000), GDS (2011: 1079-1108).

以上からデンマーク語心態詞の定義において必要条件とされるのは、統語上の条件である「その語が中域に現れている」ことのみであると言えるであろう。しかしながら、それは十分条件ではないので、各語がどのような意味・機能を持つ場合に心態詞とされるのかについては、先述の参考文献による説明を精査し理解していくほかない。

以下では、各語の心態詞としての意味・機能について例文を用いながら、確認していくことにする。

### 3. デンマーク語心態詞の意味・機能

#### 3.1. *sgu*, *jo*, *skam*

GDS (2011: 1049-50) では、*sgu*, *jo*, *skam* は1つのグループとして扱われている。それはこの3語が心態詞として、ある発話に対して聞き手がどのように反応するだろうか、ということについての話し手の予想・想定に関連した意味を持つ、という点で共通しているからだと考えられる。

##### 3.1.1. *sgu*

*sgu* の心態詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1099) にしたがえば、以下のように要約することができる。

*sgu* : 話し手が、話し手自身の発話における命題内容の蓋然性・信憑性を強く主張するということと、したがって考えられるいかなる反論も受け付けない、ということを聞き手に伝える機能を持つ。

- (1) Du er *sgu* blevet fodsportsmand. (Davidsen-Nielsen: 4)<sup>6</sup>

〈君はほんとうにランナーになったんだ。〉

- (2) det vil jeg *sgu* ikke være med til (GDS: 1099)

〈それに参加するつもりは絶対にない。〉

##### 3.1.2. *jo*<sup>7</sup>

*jo* の心態詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1091) にしたがえば、以下のように要約することができる。

<sup>6</sup> 例文中の斜体・太字は筆者によるもの。以下の例文についても同様である。また本稿ではデンマーク語心態詞に日本語訳を与えているが、デンマーク語心態詞を日本語の訳出する際には複数の可能性が考えられることをここに断っておく。

<sup>7</sup> *jo* には、否定疑問文への肯定の答えを導く間投詞の *jo* や、*jo* ..., *desto* ... などの構文に現れる接続詞としての機能もある。

jo : 話し手が、話し手自身の発話内容について、聞き手がその内容に対して反論をせず、同意してくれるだろう、と思っていることを聞き手に伝える機能を持つ。<sup>8</sup>

(3) Det er *jo* to sider af samme sag. (Davidsen-Nielsen: 5)

〈それは同じことの2つの側面ですね。〉

しかしながら次の例から明らかなように、聞き手側が、jo が含まれる文の内容に関して反論できないというわけではない。

(4) A: Så bliver du *jo* den største danske fodboldstjerne?

B: Nej, det gør jeg nok ikke. Sådan fungerer tingene ikke. (GDS: 1092)<sup>9</sup>

〈A: それであなたはデンマークサッカー界の最も偉大なスター選手になるというわけですね。 B: いいえ、そうはならないでしょう。そんな風にことは運びません。〉

### 3.1.3. skam<sup>10</sup>

skam の心態詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1050) にしたがえば、以下のように要約することができる。

skam : 話し手は、聞き手が話し手の発話内容とは違う見解を持っていることを前提としており、話し手はまさにその見解に反論し、話し手自身の見解を聞き手が承諾してくれると思っている、ということを聞き手に伝える機能を持つ。

(5) John er *skam* i London. (Davidsen-Nielsen: 4)<sup>11</sup>

〈ジョンはほんとうにロンドンにいるんだってば。〉

<sup>8</sup> Davidsen-Nielsen (1993: 3) による jo の説明には、「聞き手が述べられている状況について知っており」という部分が含まれているが、GDS (2011: 1091) では、そのことは jo の意味・機能には必ずしも含まれないとしている。

<sup>9</sup> (4) は、GDS で示されている例に、話し手と聞き手の発話がより明確になるように筆者が修正を加えたものである。

<sup>10</sup> skam には、〈恥〉や〈残念なこと〉等の意味を持つ名詞としての機能もある。

<sup>11</sup> (5) では、話し手は skam によって、「①聞き手は〈ジョンはロンドンにいる〉という内容とは異なる見解を持っていると推定されるが、話し手自身はその見解に反論する、②そして話し手自身が述べている〈ジョンはロンドンにいる〉という内容を聞き手が受け入れてくれると思っている」、ということを聞き手に伝えていると考えられる。

(6) A: Det er naturligvis ikke sandt.

B: Jo, det er *skam*. (GDS: 1050)<sup>12</sup>

<A: それは当然真実ではありません。B: いや、それはほんとうに真実なんです。>

### 3.2. da と nu

Andersen (1982), Davidsen-Nielsen (1993) および GDS (2011) のいずれにおいても、da と nu における心態詞の意味については、「話し手が聞き手の持つ見解を否定する、あるいはそれに反論する」という点が共通して指摘されている。<sup>13</sup> さらに da と nu には「話し手の発話内容が聞き手にとって既知であるか未知であるか」という違いがあることも指摘されている。<sup>14</sup>

#### 3.2.1. da<sup>15</sup>

da の心態詞としての意味は以下のようにまとめることができる。

da 1: 話し手が、①聞き手による先行の発話内容を否定する、あるいは先行の発話内容に反する内容を主張するということを聞き手に伝え、なおかつ②話し手によるその否定・反論の内容は聞き手にとって既知のもの・旧情報である、ということも伝える機能を持つ。

<sup>12</sup> (6) は、GDS で示されている例に、話し手と聞き手の発話がより明確になるように筆者が修正を加えたものである。(6) では、話し手 B の発話における <それは真実だ> という発話内容に対して、聞き手 A が反対の見解、つまり <それは真実ではない>、を持っていることが分かる。(聞き手 A による最初の発話を参照。) 話し手 B は *skam* を用いて、「①この <それは真実ではない> という見解に対して反論し、②なおかつ <それは真実だ> という内容を聞き手が承諾してくれると思っている」、ということを書き手に伝えていていると考えられる。

<sup>13</sup> Andersen (1982: 90-91), Davidsen-Nielsen (1993: 3), GDS (2011: 1055).

<sup>14</sup> Andersen (1982: 90), Davidsen-Nielsen (1993: 3), GDS (2011: 1055).

<sup>15</sup> da には、① <そのとき、あのとき> という「時」を表す副詞の機能、② <それなら、それでは> という意味の接続副詞としての機能、③ <～なので> という「理由」を表す従位接続詞としての機能、④ <～したとき> という「時」を表す従位接続詞としての機能もある。

(7) A: Jeg har bedt Jens om at optage det hele på bånd.

B: Det kan han *da* ikke finde ud af. (Andersen: 89)<sup>16</sup>

＜A：僕はイエンスに全部をテープに録音してくれるように頼んだ。

B：それは彼は成し遂げることはできないでしょ／だろ。＞

しかしながら GDS (2011: 1055-57) では、話し手が否定・反論をすることになる見解は、必ずしも聞き手によって提示される見解であるとは限らず、聞き手以外の第三者が持っている見解、あるいは会話状況や先行する文脈では明らかとなっていない潜在的な見解の場合もあることが指摘されている。したがって *da* における心態詞としての意味には以下の意味を付加しておく必要があるだろう。

*da* 2：話し手が、① 第三者による見解、あるいは会話状況や先行する文脈では明らかにならなっている潜在的な見解に対して、その見解を否定・反論するということを聞き手に伝え、なおかつ ② 話し手によるその否定・反論の内容は聞き手にとっても既知のもの・旧情報である、ということも伝える機能を持つ。

(8) Loke (til Tor, på vej til fods til Halogaland og Bjarmland): Heimdal er et pjok! Hørte du ham? »Det er faaarligt at sænke Bifrost ned i den trolderede«! Bah! Trolde ville *da* brænde op på regnbuebroen, hvis de prøvede at komme til Asgård ad den vej! (GDS: 1083)<sup>17</sup>

＜(Halogaland [現在のノルウェー北西部] そして Bjarmland [現在のカレリア地方] に徒歩で向かう途中のトールに向かって) ロキ：「ヘイムダルは弱虫野郎だ！彼の言ったことを聞いたか？ “妖怪の住処にビヴロストを下ろすなんて危険だ！” だって、信じられないね。妖怪なんぞはあの道にそってアースガルズへやって来ようものなら、虹の橋の上で焼けてなくなってしまうだろうに！」＞

<sup>16</sup> Andersen (1982: 89) によれば (7) における話し手 B の発話は、「あなた [=聞き手 A] は、イエンスに全てをテープに録音してくれるように頼んだ、と言っている。イエンスに何かをテープに録音してくれるように頼むためには、彼がそれを成し遂げられることを前提とする必要がある。しかし、それを彼はできない。そしてそのことをあなたは承知している。」と解釈できるとある。

<sup>17</sup> GDS (2011: 1083) によれば (8) では、話し手であるロキは、*da* を用いて、聞き手であるトールが持つ見解に対して反論しているのではなく、第 3 者であるヘイムダルが持つ「妖怪の住処にビヴロストを下ろすことは危険だ」という見解について反論している、と考えられる。同時に *da* は、ロキによるその反論内容に関しては、聞き手であるトールにとっても既知であることも示していると考えられる。

また GDS (2011: 1084-1085) によれば、話し手が話し手自身の持つ見解に反論する場合もあるとしている。その場合、da を含む文は「譲歩」の意味で機能することになるという。

(9) A: Du har været medlem af Danmarks Kommunistiske Parti. Mange har sammenlignet kommunismen med en tro og partiet med en kirke?

B: Nu var jeg betænkelig, da jeg meldte mig ind i partiet, men [...]. Men der er *da* noget rigtigt i det du siger. [...] (GDS: 1085)<sup>18</sup>

<A: あなたはデンマーク共産党のメンバーでした。多くの人が共産主義を信仰と、そして共産党を教会と比較してきましたが? B: 共産党に入党した当時は、私は心配していましたが、(中略)。しかしあなたが言うことも確かに一理あります。(中略)>

また GDS (2011: 1054) では、da の心態詞としての意味に「話し手の主観的感情を表す」という感情表出の機能があることも指摘されている。

da 3: 話し手の主観的な感情を表出する機能を持つ。

(10) Det er *da* også utroligt – så lang tid, de er om at bestemme sig, – om de gider ha' dig! (GDS: 1054)<sup>19</sup>

<いやはや信じられないなあーこんなに長期間、彼らが君を欲しいかどうかを決めるのにかけているだなんて!>

<sup>18</sup> (9) は筆者が GDS (2011: 1058, 1085) の例を聞き手 A と話し手 B の関係が明瞭になるように書き換えたものである。GDS (2011: 1058, 1085) によれば、(9) ではインタビューである聞き手 A は、「話し手 B は、共産主義は信仰ではないし、共産党は教会ではないという見解を持つ者である」ということを前提にしていることが推定できるようだ。話し手 B は da を用いることで「共産主義は信仰ではないし、共産党は教会ではない」という自身が持つ見解に反論することを表明し、結果としてその見解を取り下げ、聞き手 A の「共産主義は信仰であり、共産党は教会である」という見解を認め、聞き手 A に対して「あなたの言うことにも一理ある」ということを述べるに至ったことを表しているという。さらには、「あなたの言うことにも一理ある」という話し手 B の発言内容が、聞き手および話し手の両者にとって、既知のもの・旧情報であることも同時に示されているという。

<sup>19</sup> GDS (2011: 1054) では、da におけるこの「感情表出」の用法においていかなる“感情”が表出されているのかについての詳細な記述はない。ただし、前述している da のその他の心態詞的用法と同様に、話し手の発話内容は、話し手にも聞き手にも既知のこと・旧情報であるという。



### 3.2.2. nu<sup>20</sup>

nu の心態詞としての意味は以下のように要約することができる。

nu 1：話し手が、① 先行する発話内容を否定する、あるいは先行する発話内容に反する内容を主張するということを聞き手に伝え、なおかつ ② 話し手によるその否定・反論の内容は聞き手にとって未知のもの・新情報である、ということも伝える機能を持つ。

(11) A: Jeg har bedt Jens om at optage det hele på bånd.

B: Det kan han **nu** ikke finde ud af. (Andersen: 90)<sup>21</sup>

＜A：僕はイエンスに全部をテープに録音してくれるように頼んだ。

B：それは彼は成し遂げることはできないですよ。＞

da の場合と同様に、nu においても話し手が否定・反論をすることになる見解は、必ずしも聞き手によって提示される見解であるとは限らず、聞き手以外の第三者が持っている見解や、会話状況や先行する文脈では明らかとなっていない潜在的な見解の場合もある。そのため、nu における心態詞としての意味には以下の意味を付加しておく必要があるだろう。

nu 2：話し手が、① 第三者による見解、あるいは会話状況や先行する文脈では明らかになっていない潜在的な見解に対して、その見解を否定・反論するということを聞き手に伝え、なおかつ ② 話し手によるその否定・反論の内容は聞き手にとっても未知のもの・新情報である、ということも伝える機能を持つ。

<sup>20</sup> nu には、① <今> という「時」を表す副詞としての機能、② <それなら、それでは> という意味の接続副詞としての機能もある。

<sup>21</sup> Andersen (1982) によると、(11) では、話し手 B の発話内容「それを彼は成し遂げることはできない」については、聞き手 A は何も知らないということになる。話し手 B は nu を用いて、① 聞き手 A の発話内容「イエンスにテープの録音を頼んだ」に対して話し手 B にはその内容を否定する意志があり、② なおかつ「それを彼は成し遂げることはできない」という内容は聞き手 A にとって未知の事柄であると話し手 B が思っていること、を聞き手に伝えていていると考えられる。

(12) Der var en gang en mand som hed Viktor. Han boede på en ø. Hans eneste ven var en tam måge.

- Det kunne **nu** være sjovt at træffe nogle mennesker, sagde Viktor.

- Krrr, sagde mågen. (GDS: 1056)<sup>22</sup>

＜昔々ヴィクタという名の男が一人いた。彼はある島で暮らしていた。彼の唯一の友達は、飼いならされた鴉だった。「人間に会ってみるのも楽しいかもしれないよ」とヴィクタが言った。「クークー」と鴉は言った。＞

また GDS (2011: 1058) によれば、話し手が話し手自身の持つ見解に反論する場合もあり、その場合、nu を含む文は「譲歩」の意味で機能することになるという。

(13) A: Du har været medlem af Danmarks Kommunistiske Parti. Mange har sammenlignet kommunismen med en tro og partiet med en kirke?

B: (...) Men der er **nu** noget rigtigt i det du siger. (...) (GDS: 1085)<sup>23</sup>

＜A: あなたはデンマーク共産党のメンバーでした。多くの人が共産主義を信仰と、そして共産党を教会と比較してきましたが？B: (中略) しかし言われてみればあなたが言う事も確かに一理ありますよ。(中略)＞

### 3.3. nok, vel, vist

以下に述べる nok, vel, vist は、これまでの心態詞と同様、話し手の心的態度を示す機能を持つが、とくに発話内容の真実性・蓋然性に関する話し手の

<sup>22</sup> GDS (2011: 1056) によれば、この会話において nu が示す反論の対象となっている見解は「人に会う必要はない」であると推定できるようだ。この見解が誰のものであるのかについては、文脈上明らかにはなっていないが、重要なのはこの見解が聞き手の見解ではない、ということであり、話し手は nu を用いて、聞き手以外の人物がもつこの見解に対して反論し、自身の意見「人に会うのも楽しいかもしれない」を文脈に新情報として導入していると考えられる。

<sup>23</sup> (13) は筆者が GDS (2011: 1058) の例を聞き手 A と話し手 B の関係が明瞭になるように書き換えたものである。(13) では、(9) と同様に、話し手 B は nu を用いることで「共産主義は信仰ではないし、共産党は教会ではない」という自身が持つ見解に反論することを表明し、結果としてその見解を取り下げ、聞き手 A の「共産主義は信仰であり、共産党は教会である」という見解を認め、聞き手 A に対して「あなたの言うことにも一理ある」ということを述べるに至ったことを表していると考えられる。しかし GDS (2011: 1058) が指摘しているように、da の場合とは異なり、「あなたの言うことにも一理ある」という話し手 B の発言内容は、聞き手にとって、未知のもの・新情報であることも同時に示されているため、話し手 B の発話によって話し手 B は自身の見解・立ち位置が変化した、ということも示しているという。

心的態度について何かしらのことを表すという点で共通している。<sup>24</sup>

### 3.3.1. nok<sup>25</sup>

nok の心態度詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1058) にしたがえば、以下のように要約することができる。

nok：話し手の発話内容における真実性・蓋然性を保証するのは、話し手自身だけである、つまり話し手の発話内容は話し手の純粋な推量である、ということを聞き手に伝える機能を持つ。

(14) Det var **nok** alligevel et bedrag. (Davidsen-Nielsen: 5)

〈それはやはり 1 つの詐欺だったのだろう。〉

(15) der er **nok** ikke mere øl i køleskabet (GDS: 1059)

〈冷蔵庫にもうビールはないでしょう。〉

### 3.3.2. vel<sup>26</sup>

vel の心態度詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1061) にしたがえば、以下のように要約することができる。

vel：話し手が、話し手の発話内容に関して聞き手の承認・支持を求めている、ということを聞き手に伝える機能を持つ。

(16) Politiet i byen har **vel** spurgt Dem ud om hver enkelt brand siden august. (Davidsen-Nielsen: 5)

〈この街の警察は、8 月以降の火事について 1 つ 1 つあなたに尋問したのでしょうか？〉

(17) Den pige kommer du til at smide ud, og dét i en fart! Jeg har da **vel** krav på at kunne være i mit eget hjem. – Randi har haft sit hjem her i det sidste år, Gitte, sagde jeg lavmælt, men bestemt. (GDS: 1061)

〈あの娘をあなたは放り出すの、それもすぐに！私にだって自分の家

<sup>24</sup> Jensen (2000) および GDS (2011) によれば、現代デンマーク語に見られる nok, vel, vist における心態度詞的な意味は 19 世紀後半以降に定着したものと考えられる。

<sup>25</sup> nok には、① 〈十分に〉 という意味の程度の副詞としての機能、② 〈確かに〉 という意味の譲歩の副詞としての機能もあり、③ 一般に法助動詞 skulle とともに用いて、〈きっと～します〉 という請負の意味で使われる場合もある。

<sup>26</sup> vel には、否定文の後において付加疑問文を作る機能もある。

にいられる権利ぐらいあるでしょう？— ランディはこの半年間ここが自分の家だったんだ、ギデ、と私は押し殺した声で、だがはっきりと言った。>

### 3.3.3. vist<sup>27</sup>

vist の心態詞としての意味は、Davidsen-Nielsen (1993: 3) および GDS (2011: 1105) にしたがえば、以下のように要約することができる。

vist: 話し手は、自身の発話内容が真実であると考えているが、その根拠は話し手自身の判断ではなく、第三者的な要因（話し手・聞き手以外の第三者あるいは状況など）である、ということを聞き手に伝える機能を持つ。

(18) Og han er *vist* ved at gøre nogle fine bekendtskaber. (Davidsen-Nielsen: 5)  
 <またどうやら彼はセブな顔見知り何人かつくりつつあるらしい。>

(19) der er *vist* ikke mere øl i køleskabet (GDS: 1059)  
 <確か冷蔵庫にはもうビールはなかったはずだ。>

### 3.4. altså, ellers, dog

以下で扱う altså および ellers は、これまで扱ってきた語とは異なり、2 音節語である。しかし altså にも ellers にも、それらが中域に現れる場合に、心態詞としての意味があることが明らかとなっている。<sup>28</sup> また altså, ellers および dog はどれもそれぞれ心態詞としての意味として、「話し手の主観的感情を表す機能」を持つという点で共通している。

#### 3.4.1. altså<sup>29</sup>

altså の心態詞としての意味については新谷 (2007) において詳しく説明されているが、さらに GDS (2011: 1079-1080) を参考にして以下のように要約することができる。

<sup>27</sup> vist には、<確かに> という意味を持つ譲歩の副詞としての機能もある。

<sup>28</sup> Andersen (1982), Jensen (2000), 新谷 (2001, 2007), GDS (2011).

<sup>29</sup> altså には他に、① くしたがって、ようするに、つまり> など、理論的帰結や因果関係を表す機能、② くすなわち、言い換えれば、つまり> など、補足内容を導く機能、③ くあのねえ！、いいかい！、やれやれ！> など、間投詞的に用いられ、いらだち、批難などの様々な感情を表す機能がある。（altså の意味の詳細な記述は新谷 (2007) を参照。）

altså 1：話し手が、聞き手による先行の発話内容に関連して、話し手自身の発話内容が聞き手の計画に反するものであることを聞き手に伝え、なおかつ聞き手に計画の変更を促そうとしていることを伝える機能を持つ。

(20) A: Jeg tager til København i morgen.

B: Birgit kommer *altså* hjem. (Andersen: 91)<sup>30</sup>

＜A: 僕は明日コペンハーゲンへ行きます。 B: ビアギトが帰ってくるんですけどね。＞

(21) Klokken er *altså* syv, du skal op nu. (GDS: 1080)<sup>31</sup>

＜7時なんですけど、もう起きてよ。＞

新谷（2007：24-26）にも指摘されているように、altså には心態詞として「話し手の主観的感情を表す」機能もあり、その場合の altså の意味は以下のよう表される。<sup>32</sup>

altså 2：話し手の主観的感情、「驚き」、「いらだち」、「とがめ」等を表す機能を持つ。

(22) nu kan det *altså* være nok! (GDS: 1080)

＜もういいかげん十分だろう！＞

(23) hvor er det *altså* spændende! (GDS: 1080)<sup>33</sup>

＜それはなんとワクワクするんだろう！＞

<sup>30</sup> Andersen (1982: 91) および新谷（2007：27）によれば、(20) では聞き手 A の発話から聞き手 A が「明日コペンハーゲンに行く」という計画を持っていることが明らかとなっていて、その上で話し手 B は altså を用いて「ビアギトが帰ってくる」という自身の発話内容によって、聞き手 A に計画の変更を促そうと試みていることを伝えていると考えられる。

<sup>31</sup> GDS (2011: 1080) によれば、(21) では、聞き手に「寝続ける」という計画・意図があることが、話し手により前提として想定されており、話し手は altså を用いることで話し手自身の発話内容「7時である」ということを、聞き手が聞き手の計画・意図を変更する要因として理解して欲しいということを伝えているという。

<sup>32</sup> 話し手の主観的感情を表す altså の心態詞的な用法については、Jensen (2000: 72) でも取り上げられている。Jensen によれば、altså が話し手の主観的感情を表す場合には、jeg erklærer (hermed) at ... ＜私は（ここに）（…）であると表明する＞ というように言い換えることが可能であるようだ。しかし新谷（2007：24-25）でも指摘されている通り、この言い換えによって altså がどのような主観的感情を表しているのか、ということについてまでは明らかとはなっていない。

<sup>33</sup> (22) も (23) も GDS において altså が話し手の主観的感情を表す例として挙げられているが、その感情がどのような種類のものなのかについては言及されていない。

3.4.2. *ellers*<sup>34</sup>

*ellers* の心態詞としての意味については、新谷（2001）の中で、Andersen（1982）および ODS の記述に基づき詳しく説明されているが、さらに Jensen（2000: 100-105）および GDS（2011: 1088）の記述を参考にすると、以下のよう  
に要約することができる。

*ellers* 1: 話し手は先行する聞き手の発話内容の逆を想定しており、  
なおかつ話し手自身の発話内容は、聞き手による発話内容の逆の正  
当性・優位性を根拠づけるものである、ということを聞き手に伝える  
機能を持つ。<sup>35</sup>

(24) A: Jeg vil ikke have noget sovs

B: Der er *ellers* bacon i (Jensen: 100)<sup>36</sup>

<A: ソースなんかいらない。B: (ソースには) ベーコン、入ってる  
けど? (それでも本当にいらないの?)>

また Jensen (2000: 103) および GDS (2011: 1088) によれば、*ellers* 1 は必ず  
しも聞き手の発話内容に対してのみ用いられるのではなく、話し手自身が持  
つ見解や第三者の見解に対しても用いられることが指摘されている。

(25) Jeg kan ikke få den til at virke. Jeg har *ellers* fulgt brugsanvisningen til  
punkt og prikke. (Jensen: 103)

<私はそれを上手く作動させることができない。取扱説明書にちゃんと  
従ったんだけどな (どうして上手くいかないの?)>

(26) Det er mærkeligt at partiet Venstre er så glade for Den Europæiske Union.  
De er jo *ellers* liberalister. (GDS: 1088)

<Venstre (左党) があれほど EU に傾倒しているのは奇妙だ。彼らは  
リベラル派なのにね。(なぜ EU に傾倒するのだろう?)>

新谷（2001: 35-37）、Jensen（2000: 105-106）および GDS（2011: 1088）にも  
指摘されているように、*ellers* には心態詞として「話し手の主観的感情を表す」

<sup>34</sup> *ellers* は、接続副詞として <そうでなければ; それ以外に; ふつうは> などの意味があ  
る。( *ellers* の意味の詳細な記述は新谷（2001）を参照.)

<sup>35</sup> Andersen（1982: 91）ではさらに「聞き手に対してなぜそのような発言をしたのかとい  
うことについての説明を促す機能」を持つとも言及されている。

<sup>36</sup> Jensen（2000: 101）によれば、(24) の会話は4歳の息子と父親との間で交わされたもの  
で、その意味するところは、「君はソースをいらないと言っている、でも君はあまりに  
も間違った根拠に基づいて態度を決めている。そこで私は君に伝える、君の予想に反  
して、ベーコンが入っているのだということを、そしてこの情報によって、君は意見  
を変えるかもしれない」である、と説明されている。

機能もあり、その場合の *ellers* の意味は以下のように表される。

*ellers* 2 : 「ほんとうは…なんだけど (なあ!)」という話し手の主観的感情を表す機能を持つ。<sup>37</sup>

(27) Det var *ellers* et sygt billede! (Jensen: 105)

〈それはほんとうは変わった絵なんだけどなあ!〉

(28) Han er *ellers* ikke bange af sig, hva'! (GDS: 1088)

〈彼は実は根っからの臆病者ではないんだけどなあ!〉

### 3. 4. 3. *dog*<sup>38</sup>

Davidson-Nielsen (1993: 3-4), Jensen (2000: 116-119) および GDS (2011: 1085-1087) にも指摘されているように、*dog* には心態詞として「話し手の主観的感情を表す」機能があり、その意味は以下のように表される。

*dog* : 話し手の主観的感情, 「驚き」, 「とがめ」等を表す機能を持つ。

(29) Det var *dog* forfærdelig uheldigt! (Davidson-Nielsen: 4)<sup>39</sup>

〈それはまあなんと不運なことだこと!〉

(30) Hør mig *dog* til ende! (Davidson-Nielsen: 3)<sup>40</sup>

〈最後まで聞いてくれよ!〉

(31) Hvorfor køber du *dog* ikke en regnfrakke? (Jensen: 123)<sup>41</sup>

〈一体どうして君はレインコートを買わないんだ?〉

<sup>37</sup> Jensen (2000) および GDS (2011) では、*ellers* には話し手の主観的感情を表す「感情表出」の機能について触れられてはいるが、実際にその感情がどのような種類のものなのかについては何も言及されていない。

<sup>38</sup> *dog* には、くしかしながら；それでもやはり〉という意味の接続副詞の機能もある。

<sup>39</sup> Jensen (2000: 119) では、(29) は「私は、それが本当に不運なことであり、なおかつそれは私が予想していたことに反するものである、と思っている」というように言い換えられている。

<sup>40</sup> Davidson-Nielsen (1993: 3-4) では、(30) は話し手が、聞き手が一見話を聞き続ける意思がないように思われることに対して反応を示している、という説明が付加されており、さらに Jensen (2000: 118) によれば、(30) は「私が思うに、君が実際にしていることとは反対に、君は最後まで私の話を聞くべきだ」というように言い換えられるとある。

<sup>41</sup> Jensen (2000: 123) によれば、(31) は「私が思うに、君はレインコートを買うべきだ、実際に君がしていることに反して」というように言い換えることができるとある。

#### 4. おわりに

以上 *sgu, jo, skam, da, nu, nok, vel, vist, altså, ellers, dog* の 11 種類の心態詞の意味についてできるだけ簡潔にまとめることを試みたが、実際のところ以上の説明では物足りなさを感じるかもしれない。ただデンマーク語心態詞における意味・機能が非常に複雑であるにもかかわらず、会話・談話においてその意味・機能が無視してしまうと会話・談話が成立しなくなってしまうほど重要な役割を果たしていることは明らかになったと思われる。ただ、今回は紙幅の都合上、GDS で心態詞として扱われているもの全てに言及できたわけではないことを付け加えておかなければならない。

次のⅡ章では、*da* および *nu* が心態詞として使われている実際の例を用い、その意味するところについてさらに詳しく確認する。さらにⅢ章では、デンマーク語小説の邦訳において心態詞がどのように訳されているのかについて検討する。そしてⅣ章では、日本語小説のデンマーク語訳において、どのような和文表現がデンマーク語の心態詞を用いて訳されているのかについて検討する。



## II. 心態詞 da と nu の実際の例

(Martin Paludan-Müller・新谷 俊裕)

### 1. はじめに

第 I 章では、Torben Andersen, Niels Davidsen-Nielsen, Eva Skafte Jensen や GDS の Erik Hansen, Lars Heltoft らの言語学者、デンマーク語学者によるデンマーク語心態詞の記述を概観した。本章では、心態詞のうちの da と nu に関して、デンマーク語の教科書セット *DET KOMMER! Dansk som andetsprog på mellemtrin* (以下 DK と略す) から実際の用例を求め、<sup>1</sup> 主に哲学とデンマーク文学の研究者である大阪大学特任准教授の Paludan-Müller 氏 (以下 PM と略す) の解釈と共に示す。

### 2. da

1a) 話し手が、聞き手の陳述に反論し、文脈上既知の陳述を示すことで、聞き手はその反対意見を提示すべきではなかったということを表す da (GDS 1055-1058) :

ANDERS: Jeg tror, det bliver på dansk. Men hvorfor spørger du? Synes du, det er svært at følge med, når møderne er på dansk?

<[ミーティングは]デンマーク語で行なわれると思う。でも、どうして訊くの？ ミーティングがデンマーク語で行なわれると話しについていくのが難しいと思うの？>

MERCEDES: Jeg skal i hvert fald koncentrere mig meget, og det er svært, hvis jeg er lidt træt. <私はいずれにしても非常に集中しないといけな  
い。で、少し疲れていたら難しいの>

ANDERS: Men du forstår **da** det meste, gør du ikke? Og du kan også snakke med ... om materialer og økonomi og tekniske problemer og ... ja, du kan **da** snakke med om alting!

<でも、あなたはほとんどのことを理解できるでしょ、そうじゃないの？ それにあなたは…材料、経済、技術問題なんかについても話しに参加することができる…そう、あなたはあらゆることについて話しに参加することができるでしょ>

(fra EN SNAK OVER FROKOSTEN<sup>2</sup>)

<sup>1</sup> ただし、DK には nu の例が少ないので、第 III 章で扱うテキスト H から例を示す。

<sup>2</sup> DK のテキストは本冊、指導要綱、インターネットからダウンロードする教材等の中にあり、出典頁を示し難いので、頁数ではなくテキストのタイトルを示すことにする。

**PMの解釈：**あなたは、ついていけるかという質問に部分的に肯定的に答えているが、あなたは実際、あらゆることについて話しに参加することができ、そのことをあなたは知っている。なので、あなたは、あなたにとって難しいということを言うべきではない。<sup>3</sup>

**MERCEDES:** Nej, ikke alting ... og ikke altid. Det kommer an på, hvem jeg taler med ... og på mit humør og på ... Ja, det kommer an på mange ting. Somme tider synes jeg, at jeg udtrykker mig som en 12-årig!  
 <いいえ、何でもというわけじゃない…それにいつもじゃないし。誰と話しているか…それに私の気分次第ね…そう、たくさんのことににかかわってくるの。時々私は自分が12歳児のような話し方をしていると思うの>

**ANDERS:** Åh, hold op! Det gør du *da* ikke!  
 <ああ、やめなよ！そんなことはないでしょ>

(fra EN SNAK OVER FROKOSTEN)

**PMの解釈：**あなたは、あなたが（時々）12歳児のような話し方をすると言っているけれども、そんなことはない、そしてそのことをあなたは知っている。<sup>4</sup>

**ANDERS:** Nå, vi må videre. Jeg mangler at tegne 2-300 vinduer. Sig mig ... er du ikke bange for at blive for tyk? Så meget som du spiser!  
 <さて、仕事を続けなくちゃ。僕は2-300の窓をまだ描き終わってない。ねえ、あなたは太り過ぎると心配しないの？そんなにたくさん食べて！>

**MERCEDES:** Hva'!? Jeg har *da* kun spist salat!  
 <何ですって！私はサラダしか食べてないでしょ>

(fra EN SNAK OVER FROKOSTEN)

**PMの解釈：**私がたくさん食べると、あなたはまさに観察したと言っているけれども、私たちはふたりとも、わたしがまさにサラダしか食べていないことを知っている。<sup>5</sup>

<sup>3</sup> Du svarer delvis bekræftende på spørgsmålet, om det er svært at følge med, men du kan faktisk snakke med om alting, og det ved du. Derfor bør du ikke sige, at det er svært for dig.

<sup>4</sup> Du påstår, at du (somme tider) udtrykker dig som en 12-årig, men det passer ikke, og det ved du.

<sup>5</sup> Du påstår, at du netop har observeret, at jeg spiser meget, men vi ved begge, at jeg netop kun har spist salat.

BOZENA: Jamen, folk siger det også, hvis de har været i biografen eller på cafe sammen - eller hvis de bare har været med til den samme fest.

〈でも、人々は映画館やカフェに一緒に行った後も、あるいは同じパーティに一緒に参加しただけでもそう言うよ〉

CHRIS: Nej! Man siger *da* kun *tak for sidst*, når man har været hjemme hos nogen - altså hjemme hos dem selv - privat!

〈いいえ、誰かの家に行った時、つまり彼ら自身の家に、しかもプライベートに、行った時だけ、*tak for sidst* と言うんでしょ〉

(fra TAK FOR I AFTEN og TAK FOR SIDST)

PMの解釈：Bozena の *også* と *bare* に結びついた一般的な主張は否定され、かつ、制限される。<sup>6</sup>

- 1b) 聞き手が口には出していないものの、その反対意見を持っていると話し手が思う事柄に対して、話し手は、文脈上既知の陳述を示すことで、聞き手がその反対意見を持つべきではないということを表す *da* (GDS 1055-1055)：

ANNETTE: Nej, det synes jeg er flot, at de gør sådan noget.

〈いいえ、彼らがそういうことをするのは立派だと私は思うわ〉

METTE: Ja. Ja, han var smaddersød, lægen. Det var han virkelig.

〈そうそう、彼はとても親切だった、あのお医者さんは、ほんとうにそうだった〉

ANNETTE: Din søn han må *da* også have været helt stolt af sådan en rød og en grøn ... 〈あなたの息子さん、彼もそんな赤い腕とグリーンの腕をとても自慢に思ったに違いないわね〉

(fra UHA, DET MÅ HAVE GJORT ONDT)

PMの解釈：驚くべき嬉しい結論：そのオファーと医師の特別な資質に対する驚きの延長上にあつて、男の子たちがそのようなことを私たちはふたりとも知っている。<sup>7</sup>

<sup>6</sup> Bozenas generelle påstande forbundet med 'også' og 'bare' negeres og indsnævres.

<sup>7</sup> Overraskende glædelige konklusion: det ved vi begge om (dreng) børn – i forlængelse af overraskelsen over tilbuddets og lægens særlige kvaliteter.

PATRICK: Jamen man kan jo ikke bevise det, vel? At man har løbet jorden rundt. Måske har han taget en bus noget af vejen. Eller et fly. Eller måske bare fået et lift med en bil en gang imellem. Det ville jeg *da* gøre! Der er jo alligevel ikke nogen, der kan tjekke det, når man løber alene.

くああ、でも、それを証明できない、よね？ 走って地球を一周したってことを。もしかして彼は途中でバスに乗ったかも。もしくは飛行機に。あるいはもしかしたらほんの時々だけでも車に乗せてもらったかも。僕だったら、そうするけどね！ 独りで走っていたら、どうせだれもチェックできないでしょ

(fra MAN KAN JO IKKE BEVISE DET!)

**PMの解釈：**強調された私は何が正常であるかについての参照点である：私たちはふたりとも、全行程を走破したという主張にもかかわらず、そうすることがまったく普通であることを知っている。<sup>8</sup>

MARK: Det er jeg ikke så vild med. Jeg er mere til rock. Men det er *da* mærkeligt, at nogle af de mest berømte guitarister alle sammen er ældre end dig! Er de ikke født i 40'erne alle tre?

くそれ〔ブルース〕はあまり好きじゃない。ロックの方が好きなんだ。しかし最も有名なギタリストの何人かがみんなあなたよりも年上だなんて変でしょ！彼らは3人とも40年代生まれじゃない？>

(fra VERDENS BEDSTE GUITARISTER)

**PMの解釈：**私たちはふたりとも、驚くべきことにこのことは統計的一般分布に反していることを知っている。<sup>9</sup>

- 2) 話し手が、話し手自身の意見に反論し、外部にある既知の事柄に同意することを表す譲歩の *da* (GDS 1055-1058) :

Øhm. Altså jeg har hørt nogle steder, at tosprogede har nemmere ved at lære sprog. Og jeg vil *da* også sige, at nogle gange så kan jeg nemmere genkende ord eller noget grammatik fra bosnisk eller sådan noget, men jeg har ikke kunnet mærke nogen forskel fra mig og de andre på min klasse.

くえー。つまり私は、バイリンガルは言語習得がより容易いと何箇所かで聞い

<sup>8</sup> Det betonedes jeg er referencepunkt for normalitet: Vi ved begge, at dette ville være helt normalt uanset påstanden om at have løbet hele vejen.

<sup>9</sup> Vi ved begge, at dette overraskende strider mod en statistisk normalfordeling.

たことがあります。そして私は、確かに実際、何度かはボスニア語の単語や文法なんかをより容易く再認識できることがあると言いたいのですが、しかし私とクラスの他の人たちに違いがあるとは認識できません

(fra EN SNAK OVER FROKOSTEN)

**PMの解釈**：私には一般的主張に合致する経験がある。<sup>10</sup>

3) 前提となる合意に対する感情表出の da (GDS 1054) :

NICKLAS: Hold kæft, en udsigt! Det er *da* et fedt sted at bo.

〈何て眺めだ！住むのにほんとうにすばらしい場所だな〉

(fra NUMMER NI PÅLISTEN)

**PMの解釈**：私はその場所のすばらしさに驚いている。<sup>11</sup>

ISSA: Nå, og så gik du bare hen til ham og sagde, at .. „Du ser sød ud“?

〈そう、それであなたはさっさと彼の所に行って、「あなたかわいいわね」と言ったの?〉

DINA: Ja, det gjorde jeg faktisk ... 〈ええ、実際そうしたわ〉

ISSA: ... nåh det var *da* meget sjovt.

〈…ええ、それはほんとうにとてもおもしろい〉

(fra DET ER EN, DER HEDDER JIMMY)

**PMの解釈**：驚くべき独創的なことへの賞賛。<sup>12</sup>

DINA: ... han så sød ud. Og så gik jeg over til ham. Og så dansede vi hele natten.

〈…彼はかわいかった。それで私は彼の方に行った。そして私たちは一晩中踊ったの〉

ISSA: Nåh, det var *da* hyggeligt.

〈そうなの、それはほんとうに良い雰囲気だこと〉

(fra DET ER EN, DER HEDDER JIMMY)

**PMの解釈**：一般的に認められたくつろぎとしての Dina の体験への強調された喜び。私たちはふたりとも、その手のことはくつろげて楽しく、もしかしたらあなたにとって必要だということを知っている。<sup>13</sup>

<sup>10</sup> Jeg har oplevelser, som stemmer med den generelle påstand.

<sup>11</sup> Jeg er overrasket over stedets fedme.

<sup>12</sup> Anerkendelse af noget overraskende originalt.

<sup>13</sup> Empatisk glæde over Dinas oplevelse som almindeligt anerkendt hygge: Vi ved begge, at 'den slags' er hyggeligt og måske tiltrængt for dig.

MICHAEL: Og hvad så? Jeg måtte på skadestuen. Det var nede på gågaden. Der var ingen biler. Der var ingen taxaer og så videre, så jeg gik til Kommunehospitalet, — hele vejen.

〈それで？ 私は救急病棟に行かなくてはいけなかった。それは下の歩行者天国でのことだった。車は一台も通っていなかった。一台のタクシーなんかもいなかった。だから私は市民病院まで歩いた、道のりをずっと〉

BODIL: Gud, der er *da* langt! 〈まあ、それはほんとうに遠いでしょ〉

(fra BANG! - LIGE IND I EN GLASDØR)

PMの解釈：私たちはふたりとも、そのような状態でそんなに長い距離をふつうは歩かないことを知っているの、驚きである。<sup>14</sup>

### 3. nu

心態詞の *da* が頻出するのに対し、心態詞の *nu* はその出現が非常に稀である。

- 1) 話し手が、第三者あるいは聞き手の意見に反対する、文脈上新しい陳述を示すことを表す *nu* (GDS 1055-1058).

JENS: Jamen, jeg var bare så heldig. Lægen kom lige med det samme og så på mig. Men han havde en anden patient, som han lige skulle være færdig med først, så jeg var nødt til at vente et kvarters tid.

〈ええ、でも、僕はただだとてもラッキーだった。お医者さんがすぐに来て僕を見てくれた。しかし彼には先に診てしまわないといけない別の患者がいた、だから僕は15分ほど待たなくちゃいけなかった〉

LINE: Nå, et kvarter - det var *da* ikke så slemt.

〈そう、15分 — それは大したことなかったわね〉

JENS: Ah, det var *nu* ikke så sjovt at sidde der med åben mund.

〈いや、口を開けたままあそこに座っているのはそんなにおもしろいことじゃないよ。〉

(fra PÅ SKADESTUEN DEN 31. JULI)

PMの解釈：軽く抗議をする・誤りを正す *nu*：あなたは、それがそれほどひどくなかったと言っているが、実際には、私が知っているところでは、やはりひどかった。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> Overraskelse, idet vi begge ved, at man normalt ikke går så langt i den tilstand..

<sup>15</sup> Et mildt protesterende/korrigerende 'nu': Du siger, at det ikke var så slemt, men i virkeligheden, som jeg har kendskab til, var det alligevel slemt.

- Du kan jo slet ikke spise, kan du overhovedet drikke?

<あなたはまったく食べられないじゃない。そもそも飲み物は大丈夫なの？>

- Det kan jeg godt. Det gør **nu** heller ikke ret ondt mere. (H 121:14)

<大丈夫。実際もうそんなに痛くないのよ>

**PMの解釈**：口が依然として大きな問題になっているという彼の推察に対する穏やかな異議。godtが彼の推察を取り消し，heller ikkeが事実に基づきこの取り消しの理由づけをしており，nuがこのことのシグナルを送っている。<sup>16</sup>

---

<sup>16</sup> En mild indvending mod hans formodning om, at munden stadig giver store problemer. 'godt' dementerer hans formodning, og 'heller ikke' begrundet denne dementi faktisk, hvilket 'nu' signalerer.

### Ⅲ. 小説の邦訳におけるデンマーク語の心態詞 *jo, da, ellers, nok, vel, vist*, 接続の副詞 *også*, 焦点化詞 *godt* の訳について (新谷 俊裕)

#### 1. はじめに

デンマーク語には、文の命題内容に対する話し手による事実判断あるいは価値判断を表す文副詞 (*sætningsadverbium*)<sup>1</sup> (新谷 2001: 44-45) の他に、話し手の発話する文の内容(=命題)に関する話し手の心的態度を表す心態詞 (*modalpartikel*)<sup>2</sup> と呼ばれるものがある (新谷 2001, 2014)。文副詞は文の前域および中域に現れるが、心態詞は中域にしか現れない。また、中域において、基本的に文副詞が否定辞の前に置かれ、心態詞はさらにその前に置かれるという統語的特徴がある (新谷 2001, 2007)。

わが国のデンマーク語研究者あるいは学習者は新谷 (2001) 以前にはデンマーク語心態詞の存在を知らなかったと思われる。<sup>3</sup> デ - 英辞典 DER やデ - 英大辞典 DES には心態詞のいくつかの意味に相当すると思われる訳語が散見されるものの、心態詞の存在を意識した記述は見当たらない。*ellers* や *altså* の心態詞としての意味も見られないからである。日本語による辞典、古城・松下 (1993) は DER および DES よりも心態詞に相当すると思われる訳語の数がもうすこし少ない。2005 年に完成したデンマーク語大辞典の DDO にも心態詞の意味に相当すると思われる説明は多々あるものの、心態詞の存在を意識した記述は見当たらない (新谷 2007: 22)。

筆者は新谷 (2001) の後、語彙集 (新谷 2003, 2008, 2011) で基本的な心態詞の意味の記述をしてきた。また、新谷 (2007) では *altså* の心態詞的用法について詳しく見た。<sup>4</sup> 新谷 (2001) は限られた発行部数であり、語彙集 (2003) は大学内だけの資料であるが、語彙集 (2008, 2011) はインターネットで公開している。<sup>5</sup>

<sup>1</sup> ドイツ語文法では話法詞 (*Modalwort*) ともいう。

<sup>2</sup> ドイツ語では *Modalpartikel/Abtönungspartikel*。また談話詞 (*デ diskurspartikel*, 英 *discourse particle*) とも呼ばれる。

<sup>3</sup> ただし、Allan, Holmes and Lundskær-Nielsen (1995) の英語による大部の文法書を使っている場合は事情が異なる。なお、同書 (365-368) は心態詞 *da, dog, jo, mon (ikke), nok, nu, sgu, skam, vel, vist* を *discourse particle* という名称で扱っているが、*nok/vel/vist* の意味・機能が正確に区別できていないことから *Daidsen-Nielsen* (1993) を参考にしていないことや、*altså* と *ellers* を扱っていないことから *Andersen* (1982) も参考にしていないことがわかる。

<sup>4</sup> また、2014 年発行の教科書 (新谷・Pedersen・大辺 2014) では第 22 課全体を心態詞の説明に当てた。

<sup>5</sup> <http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/danish/dictionary/ordliste.pdf> および <http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/fic/dan/pdf/all.pdf>



また、新谷（2007）もインターネットで閲覧できるようになっている。<sup>6</sup> しかしながら、2011 年に発行された日本語による辞典（森田貞雄 2011）では依然として心態詞を意識した記述は見られず、DER と大差がない。

以上のような辞典の現状を見ると、わが国のデンマーク語研究者あるいは学習者がデンマーク語の心態詞をきちんと理解しているとは思われない。そこで、本章では、デンマーク語の小説の邦訳を例に取って、心態詞がどのように訳されているかを見ることで、日本における心態詞の理解度を考察する。デンマーク人作家 Helle Helle の *Ned til hundene*<sup>7</sup> がたまたま二人の翻訳者によって翻訳されており、2 種類の翻訳<sup>8</sup> を見ることができるので、これらを分析対象とする。本章では、代表的な心態詞 *da, dog, jo, nok, nu, sgu, skam, vel, vist*<sup>9</sup> および *altså, ellers*<sup>10</sup> について検討する。また Andersen (1982) は心態詞として分析しているが、Hansen og Heltoft (2011)（以降、GDS と略す）では心態詞として扱われておらず、また岩崎 (1998: 72) のドイツ語 *auch* の説明からも接続の副詞であると考えられる *også/heller*<sup>11</sup> も検討する。さらに心態詞ではないが、GDS で初めて、その二重否定の機能が示された、焦点化詞 (*fokuspartikel*) の *godt* も対象にする。

## 2. 心態詞

対象の小説 H には心態詞の *skam* と *altså*<sup>12</sup> は見られなかった。

### 2.1. *sgu*

*sgu* は 1 例のみで、強調的に用いられているが、*det må jeg sige* 〈驚いた〉という熟語的表現と一緒に用いられているので、その日本語訳の妥当性の判断は容易ではない。

<sup>6</sup> [http://ci.nii.ac.jp/els/110006484117.pdf?id=ART0008510054&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1411456235&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110006484117.pdf?id=ART0008510054&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1411456235&cp=)

<sup>7</sup> この作品を H と略す。

<sup>8</sup> 野澤氏の訳を N、渡辺氏の訳を W と略す。

<sup>9</sup> これらの意味・機能については、Davidsen-Nielsen (1993: 3-5)、新谷 (2007)、新谷・Pedersen・大辺 (2014: 22 課)、本論第 I 章を参照。ただし、命令文内の心態詞の機能については本章で扱う。

<sup>10</sup> これらの意味・機能については、新谷 (2001, 2007)、新谷・Pedersen・大辺 (2014: 22 課)、本論第 I 章を参照。

<sup>11</sup> これらの意味・機能については、新谷・Pedersen・大辺 (2014: 22 課) を参照。

<sup>12</sup> *altså* の心態詞としての中核的意味を載せている辞典は皆無であるので、日本語訳がどうなっているか見てみたかったが、残念である。

- Det må jeg **sgu** sige, siger han. (H 157: 8fn)

<これは驚いた、と彼は言う>(S)<sup>13</sup>

<そうなんだ>(N249) // <sup>14</sup> <いやあ、参ったぜ>(W211)<sup>15</sup>

## 2.2. dog

dog は 5 例ある。

- 1) 命令文で、躊躇する相手を促す気持ちを表す dog (GDS 1071) が 3 例あるが、1 例は熟語的な表現の中にあるので検討対象としないが、W は適切な訳であるが、N は少しずれており、適切な訳ではないと思える 1 例もある。

- Sæt dig **dog** ned. (H 7: 19) // <座りなさいよ>(S)

<ほら、座ってよ>(N11) [適切な訳?] // <まあすわりなよ>(W7) [適切な訳]

また、N はともかく、W では訳出されていない 1 例もある。

- Jamen, kom **dog** indenfor, ... (H 65: 4) // <中に入りなさいよ!>(S)

<中にさあ入ってよ>(N101) [適切な訳] // <中に入って>(W85) [訳出なし]

- 2) 驚きを表す感情表出の dog (GDS 1085-1087, Davidsen-Nielsen 1993: 3-5) が 1 例あり、W は適切な訳であるが、N は誤訳であろう。

- Det var **dog** velsignet. (H 45: 18) // <なんとありがたい!>(S)

<やっぱり電気があっていいよね>(N71) [誤訳]

<いやあ、助かった>(W58) [適切な訳]

- 3) 疑問詞に始まる特定疑問文中で話し手の驚きなどの感情表出を表す dog (GDS 1085-1087, Davidsen-Nielsen 1993: 3-5) が 1 例あり、W も N も適切に訳している。

- Nej, hvorfor **dog** det? siger jeg. (H 140: 10)

<えー? いったいどうして? と私は言う>(S)

<ただどうして?>(N220) [適切な訳]

<どうしてまた?>(W187) [適切な訳]

## 2.3. nu

nu は 3 例ある。

<sup>13</sup> 本章の筆者、新谷の訳であることを示す。

<sup>14</sup> // は、例文やその訳などにおいて改行・改段落の代わりに用いることがある。

<sup>15</sup> N と W に関しては当該の心態詞を含む文(/部分)の訳のみを示す。

- 1) 命令文で、相手の望まないことを促す気持ちを表す nu (GDS 1072) が 1 例あり、N も W も適切に訳している。

- Tag **nu** det bad, så laver jeg kaffe og toast, siger han. (H 108: 5fn)

〈さあシャワーをあびて！そうしたら僕がコーヒーとトーストを用意する、と彼は言う〉(S)

〈さあほらシャワーをあびて〉(N171) [適切な訳]

〈シャワーを浴びるといい〉(W143) [適切な訳]

- 2) 文脈上新しい陳述であることを示す nu (GDS 1053-1055) も 1 例あり、これに關しては日本語訳の妥当性の判断は容易ではない。

- Det var **nu** synd, du skulle være helt alene, siger Putte. (H 76: 4)<sup>16</sup>

〈一人ぼっちでいなくちゃいけないなんてかわいそうね、とプデは言う〉(S)

〈たった独りにして申し訳なかったわ〉(N119)

〈ひとりにさせて悪いわね〉(W101)

- 3) 話し手が、第三者あるいは聞き手の意見に反対する、文脈上新しい陳述を示すことを表す nu (GDS 1055-1058) も 1 例あり、W では訳出されていない。

- Du kan jo slet ikke spise, kan du overhovedet drikke?

〈あなたはまったく食べられないじゃない。そもそも飲み物は大丈夫なの？〉(S)

- Det kan jeg godt. Det gør **nu** heller ikke ret ondt mere. (H 121: 14)

〈大丈夫。実際もうそんなに痛くないのよ〉(S)

〈もうそんなに痛くもないわよ〉(N191) [適切な訳]

〈もう痛みもなくなったし〉(W161) [訳出なし]

## 2.4. da

- 1) 命令文で、相手の望むことを促す気持ちを表す da (GDS 1072) が 1 例あるが、当該の命令表現が hold op! 〈やめろ！〉から 〈冗談じゃない！、まさか！〉に意味が変化しているので、da を適切に訳出することは難しい。ちなみに、

<sup>16</sup> 聞き手の陳述に反応して用いられる心態詞を記述するためには、その心態詞を含む話し手の陳述だけを示すのでは不十分で、聞き手の陳述も示す必要があるが、聞き手の陳述に反応しているわけではないこの種の nu を記述するためにはこの心態詞を含む陳述に先行する話しの繋がり全体を示す必要がある。具体的にこの例文の場合だと、小説の始まりから全部ということになり、事実上、繋がり全部を示すことは不可能である。この例文は、小説の主人公がふとしたことからある村落のジョンとプデという若夫婦の家に居候することになるが、ジョンが交通事故で町の病院に入院し、その付き添いでプデも家を空けることになるという状況下で発せられた台詞である。

W は命令表現そのものが誤訳となっている。

- Det lyder kedeligt. Hvad laver de?

〈おもしろくなさそうだ。彼らは何をしているの?〉(S)

- Drikker kaffe og snakker og sådan noget.

〈コーヒーを飲んでおしゃべりをしたりなんか〉(S)

- Hold *da* op. (H 157: 10fn) // 〈冗談じゃない!〉(S)

〈マジ?〉(N248) // 〈わあ、やめてくれ〉(W210)

2a) 話し手が、聞き手の陳述に反論し、文脈上既知の陳述を示すことで、聞き手はその反対意見を提示すべきではなかったということを表す *da* (GDS 1055-1058) は 11 例ある。そのうち *da* が適切に訳されているのは N が 8 例、W が 3 例であり、訳出されていないのが N、W とともに 2 例、誤訳は N が 1 例、W が 6 例ある。

- Hvad er det så? Er det selvoplevelse? 〈それじゃ何? 自分で経験したこと?〉(S)

- Næ. Jo, på en måde. 〈いえ、うん、まあある意味でね〉(S)

- Jamen, det må *da* handle om noget. (H 157: 18)

〈そう、でも何かを扱っているはずだろ〉(S)

〈何も扱ってないことはあり得ないでしょう〉(N248) [適切な訳]

〈何か書いてあるんだろう〉(W211) [適切な訳]

- Kan du ikke lave mad? 〈あなたは料理ができないの?〉(S)

- Jeg kan lave fyldte peberfrugter. Engang kunne jeg også bage sigtebrød.

〈パプリカの肉詰めが作れる。かつてはライ麦パンも焼くことができた〉(S)

De griner alle tre. 〈彼らは 3 人とも笑う〉(S)

- Jamen, det kan man *da* komme langt med, siger Putte. (H 41: 11)

〈まあでも、それだけでできればいいとこいけるでしょ、とプデは言う〉(S)

〈それくらいできると安心よね〉(N65) [適切な訳]

〈それだってちょっとしたものかもよ〉(W53) [適切な訳]

この例文では、“私” はパプリカの肉詰めが作れたり、ライ麦パンが焼けたりするくらいではどうにもならないと思っているのに対して、そうじゃないと言ってからかっている箇所である。

- Hvis det var rigtigt, skulle der æbler i, siger John, mens vi trækker stolene ud og går til bords. <もし本当なら, リンゴを入れなくちゃいけないんだ, と, 私たちが椅子を引いてテーブルにつこうとしている間に, ジョンは言う> (S)

- Du kunne **da** have taget nogle henne i garagen, siger Elly. (H 40: 14)

<わかっているでしょ, ガレージからいくつか取ってよかったのに, とエリは言う> (S)

<私のガレージからりんごを取ってよかったのに> (N63) [適切な訳]

<ガソリンスタンドのものを何やか取ってこれていいね> (W51) [誤訳]

この例文では, W は陳述内容も da も誤訳となっている.

- Du ser sød ud. <あなたはかわいい> (S)

Hun spiler øjnene op. <彼女は目を見張る> (S)

- Synes du det? Jeg ligner lort. <そう思う? 私ゴミみたい> (S)

- Nej, det gør du slet ikke. <いいえ, そんなことぜったいないわ> (S)

- Jeg ligner i hvert fald en mand. <いずれにせよ男みたい> (S)

- Nej, det gør du **da** ikke. (H 54: 13)

<いいえ, そんなことはないでしょ> (S)

<ほんとうに違うわよ> (N86) [誤訳]

<ぜんぜんそんなことないって> (W71) [誤訳]

この例文においては, 訳の二重下線部から分かるように, N も W も da を強意の副詞であると誤解しているようである.

- Har du kørekort? <あなたは免許もってるの?> (S)

- Ja, selvfølgelig. Det har John **da** også. (H 106: 4fn)

<ええ, もちろん, (あなたは, ジョンは持っていないと思っているかも知れないけど) ジョンも持ってるのよ> (S)

<ジョンもね> (N168) [訳出なし]

<ジョンも> (W141) [訳出なし]

-Du skal måske ikke så langt.

<あなたはもしかしたらそんなに遠くまで行かないの> (S)

- Nej, det er ikke så galt. Jeg skal ud til vandet.

<ええ, それほど遠くないの. 水辺までよ> (S)

- Nå, helt ud til vandet? Det er **da** langt. Ligger du i sommerhuset? (H 148: 3)

<そう, 水辺までも? それは遠いじゃないの. 別荘に泊っているの?> (S)

<それは遠いじゃない> (N232) [適切な訳]

<じゃ, 遠いわよ> (W197) [誤訳] [接続の副詞としての訳]

- 2b) 聞き手が口には出していないものの、反対意見を持っていると話し手が思う事柄に対して、話し手は、文脈上既知の陳述を示すことで、聞き手がその反対意見を持つべきではないということを表す da (GDS 1055-1055) は 4 例ある。そのうち da が適切に訳されているのは N が 3 例、W が 2 例であり、訳出されていないのが N、W とともに 1 例、誤訳は W が 1 例ある。

- Hvorfor er der ikke nogen af jer, der har bil? Alting er **da** ret besværligt for jer. (H 106: 8fn)

[相手が何か言ったわけではないが] <どうしてあなたたちの誰も車を持ってないの? 何事もあなたたちにとってかなりやっかいでしょ> (S)

<何かと大変でしょう> (N168) [適切な訳]

<困ることだらけでしょ> (W141) [適切な訳]

- Fryser du? Nu skal du få mad og vin, så får du varmen. Der skal **da** også en på dén, siger han og går hen til brændeovnen. (H 120: 6)

<寒い? さあ食べ物とワインをいただく、そうすれば温まるよ。あれにも一個くべなくちゃね, と彼は言い、ストーブの方に行く> (S)

<あれにもそれ載せなくちゃ> (N189) [訳出なし]

<あそこにも一本要るな> (W160) [訳出なし]

- Jeg tænker også på noget andet, siger Ibber.

- Det var **da** bedre, du boede lidt henne hos mig. (H 143: 8fn)

<僕は別のことも考えてる、とイバは言う。あなたはしばらくの間僕の家に住んだ方がいいんじゃないの> (S)

<君が僕の家にとちょっと住むようならもっといいんだけど> (N226) [適切な訳]

<ちょっとうちで暮らしてくれたらな> (W192) [誤訳]

- 3) 話し手が、話し手自身の意見に反論し、外部にある既知の事柄に同意することを表す譲歩の da (GDS 1055-1058) も 1 例あり、N は適切な訳、W は誤訳である。

- Du drikker **da** kaffe, ikke? (H 110: 6fn)

[コーヒーを飲んでいない様子を見て、<あなたはコーヒーを飲まない> →]

<もちろんコーヒーを飲むよ、ね?> (S)

<コーヒー飲むよね?> (N174) [適切な訳]

<コーヒーは飲まないんだっけ？> (W146) [誤訳]

- 4) 前提となる合意に対する感情表出の *da* (GDS 1054) は 4 例ある。そのうち *da* が適切に訳されているのは N が 2 例, W が 1 例であり, 訳出されていないのが N が 2 例, W が 3 例である。

- Er du allerede sluppet derfra? Fik du ikke kaffe?

<あなたはもうあそこから逃れてきたの？コーヒーを出されなかった？> (S)

- Jeg tror, hun var i gang med noget. Hun ordnede hår.

<彼女は何かしている最中だったんだと思うわ。髪の毛を整えていたもの> (S)

Han ryster på hovedet: <彼は頭をふる> (S)

- Det var *da* utroligt. Nå. To sekunder. (H 115: 3fn)

<それはほんとうに信じられない。さて、2 秒間待って！> (S)

<へえ, 信じられない> (N183) [適切な訳]

<そりゃ驚きだ> (W154) [適切な訳]

- Alt i orden, det er ikke så galt. De har opereret hans lår, han fik revet nogle sener over. Og så observerer de ham lige for hjernerystelse. Jeg skulle hilse. Her.

<なにもかも上手くいってる。そんなに悪くない。病院では彼の大腿を手術して、彼は筋を何本か切断された。その後、脳しんとうを起こしていないかどうかちょっと診察している。よろしくって。ほら！> (S)

- Det var *da* skrækkeligt, siger jeg. (H 64: 16)

<なんて恐ろしいこと！, と私は言う> (S)

<本当に恐ろしかったわね> (N100) [適切な訳]

<恐ろしいことだったわね> (W84) [訳出なし]

なお, *var* は過去のことを表しているのではなく, 感情表出の過去形であるから, N や W のように過去形として訳するのは誤訳となる。

## 2.5. *jo*

*jo* は, 聞き手が話し手の陳述に対して反対せず, 同意するだろうという話し手の心的態度を表す。

- 1) 聞き手が話し手の陳述内容を既に知っていて, それゆえその陳述に対して反対せず, 同意するだろうという話し手の心的態度を表す *jo* (GDS 1050-1053) が 17 例ある。そのうち *jo* が適切に訳されているのは N が 8 例, W が 3 例であり, 訳出されていないのは N が 1 例, W が 8 例あり, 誤訳は N が 8 例, W が 6 例ある。

- Første gang vi gik ud til hundene, siger jeg.

<初めて私たちが犬たちのところに行ったとき, と私は言う> (S)

- Der synes jeg, du sagde, at du kendte mig.

<その時, あなたが私を知っているとあなたが言ったと私は思うんだけど> (S)

- Nå, kendte og kendte. Ja, nu kender jeg dig *jo*. (H156: 3fn)

<そう? 知ってただって? うん, 今はあなたを知ってるじゃないか> (S)

<そうさ. 今は知り合いだよ> (N247) [適切な訳]

<そうだな, もうあんたを知ってるよ> (W210) [適切な訳]

- Her bor du *jo* dejligt, siger jeg. (H118: 3fn)

<すてきな暮らしをしてるわね (あなたもそう思ってるでしょ) と私は言う> (S)

<ずいぶんいい感じの家ね> (N187) [適切な訳]

<すてきに暮らしてるのね> (W158) [適切な訳]

- Døde hun her i forretningen? <彼女はこのお店で亡くなったんですか?> (S)

- Nej, da. Hvorfor tror du det? Hun døde *jo* i bilen. (H149: 5fn)

<いいえ, 違いますとも. どうしてそう思うのですか? [聞き手 (私) は実際には知らないのだが, 答えた側 (彼女) は聞き手が知っているものと思っている] 彼女は車の中で亡くなったでしょ・んじゃないの> (S)

<車に乗ってて亡くなったんじゃないの> (N236) [適切な訳]

<車の中よ> (W200) [誤訳]

- Jeg skulle *jo* have været på arbejde nu her, men jeg har fået fri. (H76: 6fn)

<(知っての通り) 今仕事に入ることになっていたのだけれど, オフにしてもらった> (S)

<私は本当なら働かなければならないのに> (N120) [訳出なし]

<今日は仕事に出るはずだったけど> (W102) [訳出なし]

Da vi har drukket kaffe, kommer John i tanke om Ajungilaksoveposerne:

<私たちがコーヒーを飲み終えた時, ジョンはアユンギラック・シュラフのことを思い出す> (S)

- De går *jo* ned til minus femogtrediv. (H36: 9)

<あれらはマイナス 35 度までいけるでしょ> (S)

<あれはマイナス三五度まで大丈夫だよ> (N56) [誤訳]

<零下三十五度だってへっちゃらだぞ> (W45) [誤訳]



- Den lille lige derovre. <ちょうど向こうのあの小さいの> (S)
- Det er kvieøen, siger John. <あれは若い雌牛の島だ, とジョンは言う> (S)
- Nu? siger Putte. <今? とプデは言う> (S)
- Den bliver brugt til græsning. Det er *jo* Pilegårds. (H10: 17)  
 <放牧に使われている. ピーレゴのでしょ> (S)  
 <持ち主はピーレゴさ> (N16) [誤訳]  
 <ともかく ピーレゴのものだ> (W12) [誤訳]

2) 聞き手が話し手の陳述内容を前もって知っているわけではないが, その陳述の背景となる事象を知っている, あるいは眼前にその事象があるために, 話し手の陳述に対して反対せず, 同意するだろうという話し手の心的態度を表す *jo* (GDS 1050-1053, 1091-1092) が 6 例ある. そのうち *jo* が適切に訳されているのは N が 2 例, W が 1 例であり, 訳出されていないのは N が 3 例, W が 4 例であり, 誤訳は N, W とともに 1 例ある.

- Er Eskild ikke jeres far? <エスキルはあなたたちのお父さんじゃないの?> (S)
- Jo, da. Han har bare altid heddet Eskild. Spørg mig ikke hvorfor. Det er nok på grund af navnet. Det er *jo* ret så specielt. (H124: 5fn)  
 <ええ, そうだとも. ただいつもエスキルとだけ呼ばれてきたんだ. 何故って訊かないで! たぶん名前のせいだと思う. かなり特殊だろう> (S)  
 <名前がかなり珍しいからね> (N197) [適切な訳]  
 <けっこう珍しいだろ> (W166) [適切な訳]

- Skal vi tage et spil uno? siger hun. – Det er *jo* ikke til at sove i. (H13: 1)  
 <ウノを一回しようかと彼女は言う. [嵐なので] 寝られたもんじゃないでしよ> (S)  
 <これじゃ寝られないもの> (N19) [訳出なし]  
 <こんなじゃ, 眠るどころじゃないもの> (W14) [訳出なし]

- Vil du virkelig gerne over på øen? <本当にあの島に渡りたいの?> (S)
- Måske. <どうしよかな> (S)
- Det kan *jo* nok godt blive ensomt for dig. (H52: 5fn)  
 <あなた, 少しさびしくならなくはないかも知れないでしよ> (S)  
 <きっとちょっぴり寂しくなるかもね> (N82) [訳出なし]  
 <ちょっぴり寂しくなると思うよ> (W67) [訳出なし]

- Ja. Bussen kører *jo* heller ikke. (H26: 11fn)

〈うん、たしかにバスも走ってないだろ〉(S)

〈バスもはしらないよ〉(N41) [誤訳]

〈バスだって走ってないし〉(W32) [誤訳]

- 3) 聞き手が話し手の陳述内容を前もって知っているわけではないが、その陳述に対して反対せず、同意するだろうという話し手の心的態度を表す *jo* (GDS 1050-1053, 1091-1092) が 12 例ある。そのうち *jo* が適切に訳されているのは N が 3 例、W が 2 例であり、訳出されていないのが N が 1 例、W が 5 例あり、誤訳は N が 8 例、W が 5 例ある。

Det er *jo* ikke andet end arbejde for mig. (H92: 6)

〈私の仕事になる以外の何物でもないでしょ (わかるでしょ) 〉(S)

〈あれのために私の仕事が増えただけじゃない〉(N145) [適切な訳]

〈こっちの手間になるだけじゃないの〉(W122) [適切な訳]

- Han skal *jo* have sin musik, siger hun. (H28: 11fn)

〈彼は自分の音楽を聴かなくちゃいけないのよ、と彼女は言う〉(S)

〈ジョンは好きな音楽を聴かずにはいられないのよ〉(N45) [適切な訳]

〈あいつ、自分の音楽じゃなきゃ気がすまないんだ〉(W35) [適切な訳]

- Ja, det var der, hun arbejdede. De var rimelig flinke derinde. De stillede her med den ene kurv efter den anden. Det tog *jo* noget hårdt på os. (H124: 8)

〈そう、彼女はあそこで働いてたの。店の人たちはかなり親切だった。ここに籠を次々と持ってきてくれた。分かると思うけど、そのことで僕たちはいくぶんまいっていたんだ〉(S)

〈僕たちにはちょっと大変なことだったからね〉(N196) [訳出なし]

〈ともかくみな辛い思いをした〉(W165) [訳出なし]

men det har været lidt hårdt for Putte. 〈しかしプデにとっては少し大変だった〉(S)

- Hun blev *jo* ret så forskrækket, siger Ibber. (H66: 5)

〈彼女はかなりこわがった、わかるだろ、とイバは言う〉(S)

〈彼女かなり恐れおののいていたよ〉(N102) [誤訳]

〈あの子はすっかり怯えてたよ〉(W87) [誤訳]

- Var der sket noget med hende? <彼女に何か起こったの?> (S)

- Nej, nej. men det troede de *jo*. (H151: 2)

<いえ、いえ。でもそう彼らは思ったんでしょ・じゃないの> (S)

<だけどブッテたちはそう思ったのよ> (N238) [誤訳]

<でも、みんな何かあったと思ってね> (W202) [誤訳]

## 2. 6. nok と vel と vist

nok, vel, vist は話し手の推量を表すが、nok は話し手自らの推量、vel は話し手の推量を聞き手に支持してもらいたいという気持ちの現れであり、vist は推量の根拠が第三者にある、すなわち、以前に見聞きしたことがあるか、今置かれた状況下で外部に推量の根拠があることを表している (Davidsen-Nielsen 1993: 3-5, GDS 1058-1061, 新谷・Pedersen・大辺 2014: 267-268)。しかしながら、N と W が参照したと思われる辞典、古城・松下 (1993)、森田貞雄 (2011)、DER, DES では、これら 3 語の訳として、「たぶん、おそらく、…だろう」"probably, I suppose, I think" が挙げられていることから、N と W ではこれらは特に区別されずに訳されているものと予想される。

### 2. 6. 1. nok

1) 話し手の推量を表す nok が 27 例ある。そのうち nok が適切に訳されているのは N が 18 例、W が 12 例であり、訳出されていないのは N が 7 例、W が 12 例あり、誤訳は N が 2 例、W が 3 例ある。なお、推量にもかかわらず nok が訳出されていないということは、すなわち、「断定」を意味し、やはり語訳と考えられる。

- Ja, han kommer *nok* hjem fredag, siger Putte. (H 41: 20)

<ええ、彼はたぶん金曜日に家に戻ってくるでしょう、とプデは言う> (S)

<ええ。叔父はきっと金曜日に帰ってくると思うわ> (N65) [適切な訳]

<うん、たぶん金曜日には家にもどれる> (W53) [適切な訳]

Så er der *nok* omkring fire ton i alt. (H 85: 6fn)

<だからたぶん全部でだいたい 4 トンあるでしょう> (S)

<だからたぶん全部で約四トンだろう> (N134) [適切な訳]

<ということは、全部で四トンはあるだろう> (W113) [適切な訳]

- Du skal *nok* skynde dig, hvis du skal nå den der. (H 93: 19)

<あなたは、もしあれに間に合いたいのなら、急がなくてははいけないで

しょう>(S)

<急がないといけないわ>(N147) [訳出なし]

<急がないと>(W124) [訳出なし]

Du kommer **nok** ikke nogen steder foreløbig. (H 19: 1)

<あなたはとりあえずどこにも行くことはないでしょう>(S)

<とりあえずどこにも行かないわよね>(N28) [誤訳]

<今のところ、どこか行くあてはないよね>(W21) [誤訳]

- 2) 請負い・約束の法助動詞 *skulle* と共に用いられて話し手が保証する気持ちを表す *nok* が 10 例ある。そのうち *nok* が適切に訳されているのは N が 3 例, W が 1 例であり, 訳出されていないのは N が 7 例, W が 9 例ある。

jeg skal **nok** spørge, om de er blevet indleveret. (H 73: 2)

<それらが届けられたかどうか、私がきっと訊きましょう>(S)

<クーポンを持ってキオスクに行ったかどうか必ず聞いてあげるわよ>  
(N114) [適切な訳]

<ともかく聞いておくわね。もう出してあるかどうか。>(W96) [訳出なし]

- Det skal jeg **nok**. (H 73: 12) <きっとそうしましょ>(S)

<約束するわ>(N115) [訳出なし]

<かならず聞いておくわ>(W97) [適切な訳]

- Det skal jeg **nok**. (H 76: 7fn) <きっとそうしましょ>(S)

<じゃ渡しとくわね>(N120) [訳出なし]

<引き受けたわ>(W102) [訳出なし]

もともと、この *nok* は必ずしも訳出しなくても良いのかもしれない。

## 2.6.2. *vel*

話し手が推量に対して聞き手の支持を求めることを表す *vel* が 7 例ある。そのうち *vel* が適切に訳されているのは N が 3 例であり, 訳出されていないのは W が 2 例あり, 誤訳は N が 4 例, W が 5 例ある。なお, 推量にもかかわらず *vel* が訳出されていないということは, すなわち, 「断定」を意味し, やはり語訳と考えられる。

- Men du kan **vel** lige sidde her en cigarets tid. (H 73: 16)

<でもたばこを吸う間ちよつとここに居てもいいんでしょ?>(S)

<だけどたばこを一服する間ここに座っていてもいいんでしょ?>(N115)

〔適切な訳〕 // <でも、一服につきあってくてもいいよ> (W97) [誤訳]

- I har *vel* depoter, siger damen... (H 27: 1)

<あなたたちには蓄えがあるんでしょう？>と婦人は言う> (S)

<あんたたち、買い置きがあるんじゃないの> (N42) [適切な訳]

<そっちはさぞや蓄えがあるんだろうね> (W33) [誤訳]

「さぞや」は *vist* に対応すると考えられる.<sup>17</sup>

Så har John *vel* dine kvitteringer et sted. (H 73: 3)

<その場合、ジョンはあなたの受取票をどこかに持っているでしょう？> (S)

<そうよ、ジョンはたぶんどこかにあなたのレシートを持ってるわよ> (N114)

[誤訳] // <ジョンはきっと受取票をどっかにしまってるのよ> (W96) [誤訳]

「たぶん」も「きっと」も *nok* に対応する。

- Hun kender *vel* Eskild. (H 9: 13)

<彼女はエスキルを知っているでしょう？> (S)

<医者はエスキルをよく知っているよね> (N14) [誤訳]

<先生はエスキルの事情はよくわかってるさ> (W9) [誤訳]

「よく」は *vel* の本来の副詞としての意味であり、中域に置かれ「よく知っている」というように用いられたのは 19 世紀半ばまでである (GDS 1065-1066).

### 2. 6. 3. *vist*

以前に見聞きしたことがあるか、今置かれた状況下で外部に推量の根拠があることを表す *vist* が 4 例ある。そのうちが適切に訳されているのは皆無であり、訳出されていないのは W が 1 例あり、誤訳は N が 4 例、W が 3 例ある。なお、推量にもかかわらず *vist* が訳出されていないということは、すなわち、「断定」を意味し、やはり語訳と考えられる。

Jeg tror ikke, der skal svesker i en kalkun, siger John.

<僕は、七面鳥にプラムを入れないと思う、とジョンは言う> (S)

- Nej. det er *vist* rigtigt nok. (H 41: 2) <そうね、確かそうだわ> (S)

<sup>17</sup> 「さぞ」は、何らかの手掛かりが契機となって、話し手の未知未見の事柄や状態を、その場面や状況の中にある立場として現在どうあるか、推測的に創造する語である。したがって、次の諸条件が前提となる。1、推測する契機があること。二人称の場合…相手の様子から。相手の話によって。三人称・その他の場合…他人の話や文章によって。報道によって。写真が手掛かりとなって。また、過去の自分の経験から。時の経過から、など。2、… (森田良行 1989: 488-489)。なお、「さぞや」の「や」は強めの助詞である (梅棹 1995: 856)。

<そうね、それはきっと正しいんじゃない> (N64) [誤訳]

<そう、きっとその通りよ> (W52) [誤訳]

「きっと」は nok あるいは sikkert に対応するであろう。

- Ja, de er **vist** blevet indleveret. (H 77: 4fn)

<ええ、どうやら届けられたみたい> (S)

<届けられたのは間違いないみたいよ> (N122) [誤訳]

<きっと出してあるわ> (W104) [誤訳]

## 2.7. ellers

「[ほんとうは/ふつうはこうだが、どうして…というように驚き・同情・遺憾の念などを表して] ほんとうは/ふつうは…なんだけど (なあ). (どうして…)」を意味する ellers (新谷 2000: 35-37) は 5 例ある。そのうち適切に訳されているのは N が 2 例、W が 3 例であり、訳出されていないのは N が 2 例、W が 1 例であり、誤訳は N、W ともに 1 例ある。

- Kommer du fredag, Ibber? siger Putte så.

<あなたは金曜日に来る、イバ? とプデは続いて言う> (S)

- Ja, tak. Jeg skulle **ellers** have hjulpet Katrine med et skab. Men hun er blevet kaldt på vagt. (H 44: 3fn)

<うん、ありがとう。ほんとうは、カトリーネをタンスのことで手伝うことになっていたんだ (が、残念)。でも彼女は当直に呼び出されたんだ> (S)

<うん、ありがと。実はカトリーヌの棚の手伝いをする事になっていたんだ> (N69) [適切な訳]

<ああ、来させてもらおうよ。ほんとうは飾り棚のことでカトリーネを手伝ってやるはずだったんだが、…> (W57) [適切な訳]

- Nå, er I her nu? Det var **ellers** min tur i dag. (H 57: 14)

<そう、あなたたち今ここにいるの? でも、ほんとうは僕の番なんだけどな、どうして?> (S)

<今日は僕の番だったの知ってる?> (N90) [誤訳]

<今日は僕の当番なんだが> (W75) [適切な訳]

Jeg linder på persiennen, men jeg kan ikke se dem derhenne. Det er **ellers** næsten fuldmåne, huset kaster en skygge skråt over vejen. (H 35: 16)

<私はブラインドを開けるが、向こうにいる彼らが見えない。でもほぼ満月

なんだけどな (どうして見えないのだろう). 家は道に斜めに影を落として  
いる> (S)

<気が付けばほとんど満月に近く> (N54) [誤訳]

<ほぼ満月の月が出て> (W44) [誤訳]

### 3. 接続の副詞 *også/heller*

事実の確認や根拠を表す *også* およびその否定版の *heller* が 10 例ある. そのうち *også/heller* が適切に訳されているのは N の 1 例のみであり, 訳出されていないのは N が 2 例, W が 5 例あり, 誤訳は N が 7 例, W が 5 例ある. なお, 誤訳は *også/heller* の基本的意味の「～も」と訳している場合である.

Som om det er svært for hende at gå på grund af sin egen bagdel. Hvad det nok *også* er. (H 89: 4fn)

<あたかも自分自身のお尻のせいで彼女にとって歩くのが困難であるかのよう  
に, 実際その通りなんだろう> (S)

<実際確かにそうなのだけれど> (N141) [適切な訳]

<きっとそのとおりだろう> (W118) [訳出なし]

Nu er hun nødt til at tage to busser for at komme hen til altnuligforretningen i dag, hun bor tredive kilometer derfra. Det skal hun *også* nok klare, (H 83: 10)

<今, 彼女は何でも屋に今日行くのに 2 台のバスに乗らなくてはいけない.  
彼女はそこから 30 km の所に住んでいる. それは彼女は実際なんとかやりお  
おせるだろう> (S)

<でもそれはきっと大丈夫だと思うけど> (N130) [訳出なし]

<行くことはできる> (W109) [訳出なし]

Du sagde, at du godt vidste, hvem jeg er. (H 156: 2fn)

<あなたは, 私が誰であるか, あなたが知らなくはない, と言った> (S)

Jamen, det er *også* rigtigt nok. (H 156: 1fn)

<まあそう, 実際, その通りだ> (S)

<そうも言ったよ> (N247) [誤訳]

<そのとおりでもあるな> (W210) [誤訳]

Hun er grundig, hun løfter potteplanter og lysestager op og støver af under dem. Alligevel er det hurtigt overstået, stuerne er *heller* ikke store. (H 46: 7fn)

<彼女は徹底している. 彼女は植木と燭台を持ち上げ, その下の埃を拭きと

る。それでも素早くし終わった。まあ、リビングとダイニングは実際大きくないけどね>(S)

<居間の中も広くないことだし、>(N73) [誤訳]

<それに大きくもない部屋だ。>(W60) [誤訳]

#### 4. 焦点化詞 godt

知識や理解を表す vide, kende, forstå, se, indse などの動詞や、法助動詞 kunne, ならびに gide などの可能を表す動詞において、否定を含む反対意見を否定する godt の機能、つまり二重否定の機能を持つ焦点化詞としての機能が GDS (1075-1076, 1090-1091) によって 2011 年に初めて明らかにされた。

Han vidste vel ikke toget var aflyst?

<彼は電車が運休になってるのを知らなかったのじゃない？>

Jo, det vidste han **godt**. <いいえ、知ってた>

Vi kan nok ikke nå toget. <私たちは電車に間に合わないだろう>

Jo, det kan vi **godt**. <いいえ、間に合います>

筆者も GDS を読むまでは、godt があってもなくても文意は同じであると思っていた。

Jeg kan (**godt**) lide lakrids. // Kan du (**godt**) lide lakrids?

しかし、GDS により今では以下のことがわかっている。Jeg kan lide lakrids は何の制限・前提も無く、ニュートラルに「私はリコリスが好きだ」という意味であるのに対し、kan godt lide の方は、相手あるいは誰かが、"jeg kan ikke lide lakrids" 「私はリコリスが好きではない」と考えているのを否定しており、すなわち、「私はリコリスが好きでなくはない」という二重否定の意味である。疑問文に godt がある場合には、「(私は、あなたがリコリスを好きではない、と思っているのですが) あなたはリコリスが好きなのですか？」という意味であり、話し手はそれに対して否定の返答を見込んでいる (GDS 1075-1076)。

H の翻訳 N も W も GDS 以降のものではあるが、GDS を参照している可能性は非常に少ないので、この godt に関しては、ほとんどの場合、二重否定が反映されることはないと予測される。N も W も 2011 年までの筆者同様、godt があってもなくても文意は変わらないと思っているとしたら、godt が訳出されることはないであろう。ただ、「～でないことはない」とような二重否定を表面に出した訳は自然な日本語ではないので、二重否定の godt は訳出しない方がむしろ良いのだということになるのかもしれない。特に小説などの翻訳ではなおさらである。



Hには焦点化詞 *godt* は25例ある。そのうちが適切に訳出されているのはNが4例、Wが2例であり、訳出されていない（つまり適切に訳されている？）のはNが12例、Wが18例であり、誤訳はNが9例、Wが5例ある。

Jeg vurderer, at det *godt* kan betale sig at bære briketterne indenfor. (H 104: 9)

〈私は、ブリケットを中に運び込むことは割りに合わなくはないと思う〉(S)

〈ブリケットを中に運ぶのが無駄な作業にならないと見積もる〉(N164)

[適切な訳]

〈ブリケットを運び込むかいはあると踏む〉(W138) [訳出なし]

- Jeg så *godt* de tøjdyr i lørdags. (H 140: 6fn)

〈私はこの前の土曜日にそれらのぬいぐるみを見なくはなかつた〉(S)

〈その動物のぬいぐるみを土曜日にちゃんと見たわ〉(N221) [適切な訳]

〈ぬいぐるみなら、土曜日にちゃんとあつたわ〉(W187) [適切な訳]

「ちゃんと」は二重否定の適切な訳語のように思われる。

Kunne du *godt* se det? (H117: 1)

〈あなたはそれを見て分からなくはなかつたの?〉(S)

〈それが分かつちやつた?〉(N184) [訳出なし]

〈それがわかるのか?〉(W156) [訳出なし]

- Kan I *godt* leve af det? (H 53: 9fn)

〈あなたたちはそれで生活できなくはないの?〉(S)

〈それで十分生活していけるの?〉(N83) [誤訳]

〈それでやっていける?〉(W69) [訳出なし]

この「十分」および次の例文の「よく」は *godt* の様態の副詞としての意味である。

Jeg kan *godt* forstå, at du er træt. (H 114: 3)

〈私は、あなたが疲れているのが、理解できなくはない〉(S)

〈あなたが疲れているのよく分かるもの〉(N180) [誤訳]

〈あなたが疲れているのはよくわかつてるわ〉(W151) [誤訳]

- Det kan jeg *godt* se, siger han. (H 111: 17)

〈それは見えなくはない〉(S)

〈今度はよく見えるよ〉(N175) [誤訳]

〈これでよく見える〉(W147) [誤訳]

## 5. まとめ

これまで見てきたことから、次の点が指摘できる。

推量の *nok*, *vel*, *vist* に関しては、予測通りに *nok* 同様、単なる「推量」として訳される傾向がある。つまり、*vel* は「聞き手から支持を求める気持ち」が、*vist* は「過去に経験した、あるいは、談話状況に見る根拠」が反映されていないので誤訳と言えよう。また、心態詞の *vel* が *vel* の本来の副詞としての意味「よく」、心態詞 *vist* が *vist* の本来の副詞としての意味「間違いなく（＝確実に）」と誤訳されることがあることがわかる。

心態詞 *ellers* が、「実は…」(N), 「ほんとうは…だが」(W) のように適切に訳されていると思われる例があるが、デ-和辞典の古城・松下 (1993), 森田貞雄 (2011) やデ-英辞典の DER, DES からこれらの訳に辿り着くことはなく、さらにデ-独辞典の DTR, DTS を用いてもこれらの訳は出てこない。どこから出てきた訳なのであろうか？

事実の確認や根拠を表す *også/heller* に関して、「実際」と適切な訳のように思われる例は N が 1 例のみであった。デ-英辞典の示すところは、*også*: DER “do”, DES “really”, “do”, *heller*: DER “(forstærkende) really ... never”, DES “really” であり、デ-和辞典の森田貞雄 (2011) は *også* 「(強意) 実際、本当に」を示しているので、上記 N の 1 例のみの「実際」は強意の意味であり、確認や根拠を表すものではないことがわかる。

二重否定の焦点化詞の *godt* は、2011 年の GDS まではネイティブでない外国人にはその意味が正しく理解されていなかったもので、N も W も適切な訳があつたり、あるいは訳出されなくて、その結果、適切な訳となっているケースが多々あるが、これらは単なる偶然であろう。一方、*godt* が「十分」や「よく」のような *godt* の本来の副詞として訳されているのは明らかに誤訳である。

以上のように、わが国においては心態詞や接続の副詞 *også* や焦点化詞 *godt* などが正しく理解されていないことが明白になった。その原因はやはり現在利用可能なデ-和辞典、デ-英辞典にあることも明白である。新しい辞典の編纂や心態詞などを詳しく説明したデンマーク語副詞辞典の編纂がこの現状の改善につながることは必至であろう。

ところで、今回検討した中に、命令文中に現れる心態詞 *da*, *dog*, *nu* があつた。これら以外にも、*bare*, *blot*, *endelig*, *gerne*, *kun*, *så* など命令文中に現れる心態詞がある。命令文中のこれらの語はたいいていの場合、「さあ…！」と訳してしまいがちになりそうであるが、それでは個々の語のニュアンスの違いがわからない。その点、GDS (1069-1072) はその違いを、簡潔かつ的確に記述している。近い将来、これらの語の違いを、豊富な例文を示しながら、解説したいものである。

#### IV. 日本語からデンマーク語への翻訳に見られる心態詞

##### －『海辺のカフカ』のデンマーク語版を一例に－（大辺 理恵）

##### 1. はじめに

本章では、日本語からデンマーク語への翻訳ではどのようにデンマーク語の心態詞が使用されているのかという点に着目し、デンマーク語の心態詞と日本語における様々な表現の間に近接点・類似点を見出しながら、デンマーク語の心態詞が意味するところについてさらに検証する。本章では、村上春樹作『海辺のカフカ』そして Mette Holm 氏によるデンマーク語翻訳版 *Kafka på stranden* を例にとり、主に会話文を中心にデンマーク語心態詞が用いられている文を収集し、心態詞がどのように使用されているのかを考察する。<sup>1</sup> 第 I 章で取り上げた心態詞のうち、Holm で心態詞としての使用例が確認されたものに限定し、jo, da, nu, nok, vel, vist, altså, ellers, dog の順に考察していくこととする。

##### 2. jo

Holm では、村上で終助詞「ネ」が使われている文に対応させて jo が用いられているものがある。<sup>2</sup>

- (1) 「じゃあこれで話は終わりね。(…)」(村上(下):196)<sup>3</sup>

”Men så er der *jo* ikke mere at tale om. (…)” (Holm: 311)<sup>4</sup>

- (2) 「(…) どこに行ったってすぐにみつかっちゃう。なにしろ狭い島国だからね。(…)」(村上(下):384)

”(…) Uanset hvor man prøver at tage hen, bliver man fundet. Japan er *jo* bare et lille ørige. (…)” (Holm: 398)

宮崎他(2002)によれば終助詞「ネ」の機能・性質は以下のようにまとめられている。

「ね」は、文の内容を、何かと一致させながら聞き手に示すときに用いられる。聞き手の知識や意向との一致を問う用法や、話し手自

<sup>1</sup> 以降、原作である『海辺のカフカ』を指す場合は村上と略し、デンマーク語版 *Kafka på stranden* を指す場合には Holm と略す。

<sup>2</sup> 本章ではこのような表現をすることが多いが、これは決して村上で「ネ」が使われている箇所が Holm において全て jo で訳出されているわけではない。本章の以下の部分でも同様である。

<sup>3</sup> 例文中の下線は筆者によるもの。以下の例文についても同様である。

<sup>4</sup> 例文中の斜体・太字は筆者によるもの。以下の例文についても同様である。

身の記憶や結論との一致を示す用法などがある。(宮崎他:280-281)<sup>5</sup>

「文の内容を、何かと一致させながら聞き手に示す (...) 聞き手の知識や意向との一致を問う用法」という「ネ」の機能・性質と、jo の「聞き手が話し手の発話内容に反論せず、同意してくれるだろうと話し手が思っていることを伝達する」という機能に近接する部分があると言えるのではないだろうか。したがって「ネ」に対応させる形で、jo が使われていることには納得がいくと思われる。

また Holm では、村上で「ナ」が用いられている箇所に、jo を対応させている例も見られる。

- (3) 「(...) それにこのあいだナカタさんに腰も治してもらったしな」(村上(下):178)

”(...) Og du fiksede **jo** min ryg her forleden.” (Holm: 303)

宮崎他(2002)では「ナ」は「独話で用いられること、用法によっては、使用者の性別や年齢の偏りが大きい(宮崎他:281)」点で「ネ」とは異なるが、対話では「ネ」に近い意味で用いられる場合があり、その場合には「ネ」と同様の機能・性質を持つとされる。したがって(1)そして(2)における「ネ」とjoの対応で説明したように、(3)において「ナ」を含む文がjoを用いて訳出されることにも納得がいくように思われる。

次に Holm では、村上で「ノダ」が用いられている箇所に、jo を対応させている例が見られる。

- (4) 「(...) 君はもう心を決めたんだ。あとはそれを実行に移すだけのことだ。(...)」(村上(上):7)

”(...) Du har **jo** besluttet dig. Der er ikke andet at gøre end at føre det ud i livet. (...)” (Holm: 6)

- (5) 「(...) 世の中に完璧なものなんてありやしないんだ、ホシノちゃん。(...)」(村上(下):121)

”(...) Vi lever **jo** trods alt i en ufuldkommen verden, Hoshino. (...)” (Holm: 279)

日本語の「ノダ」については、多くの研究者がその意味・機能についての説明に取り組んでいる。<sup>6</sup> 例えば名嶋(2007)は「ノダ」の意味・機能を抽象度の高い意味論的レベルで以下のように定義する。

<sup>5</sup> 宮崎他(2002: 278-279)では「ネ」の例として、(1)「五十嵐さんですね？」(聞き手の方がよく知っていることを確認する「ネ」(確認要求))、(2) A「暖かくなりましたね」(聞き手に同意を求める場合(同意要求)) B「そうですね」(聞き手に同意する場合(同意表明))などが挙げられている。

<sup>6</sup> 野田(1997)、田野村(2002)、宮崎他(2002)など。

ノダは、ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」(名嶋：83)

また名嶋によればこのような意味・機能を持つ「ノダ」を用いることで、「「聞き手にこの『解釈』<sup>7</sup>を受け入れさせよう」という話し手の伝達態度が、ノダを用いずに提示する場合に比べて、より明確に伝達されることになる。(名嶋：99)」という。<sup>8</sup> この点において、デンマーク語の *jo* と意味・機能が近接していると言えるかもしれない。ただし日本語の「ノダ」には様々な用法があり、その全てに対して *jo* が対応できるかどうかということはさらに検討する必要があるように思われる。

次に村上において「デハナイカ」が用いられている文が、Holm で *jo* を用いて訳されている箇所注目したい。

(6) 「でもあんたはこうして猫と話しができるじゃないか」(村上(上)：97)

”Men du sidder *jo* her og taler med en kat.” (Holm: 48)

(7) 「さっきも言ったじゃないか。(…)」(村上(下)：485)

”Det var *jo* det, jeg sagde. (…)” (Holm: 441)

宮崎他(2002:217)によれば、「デハナイカ」は確認要求機能(本章 §6 を参照)をもつ形式として「話し手の認識を聞き手に押しつける」機能があるという。同意形成を図る「ネ」とはニュアンスがことなるが、(6) や (7) は「聞き手は反論をせず、同意してくれるだろう、と話し手が思っている」ことを表す *jo* が「同意形成」ではなく、「話し手の認識の押しつけ」という、ある意味聞き手が話し手に同意するか否かを考慮しないような場合にも、使われることを示唆しているのかもしれない。

さらに村上において「ヨ」が用いられている文が、Holm で *jo* を用いて訳されている箇所についても言及しておきたい。

(8) 「スペイン戦争に参加するんだ」「スペイン戦争はずっと前に終わったよ」(村上(下)：146)

”Jeg vil gerne deltage i Den Spanske Borgerkrig.” ”Men den er *jo* slut for længe siden.” (Holm: 291)

<sup>7</sup> ノダが使われている文に現れている「解釈」を指すと考えられる。

<sup>8</sup> さらにノダの使用によるニュアンスについては、「一方では『『解釈』を共有させよう」という態度と見なされ、共通の理解に至ろうとする「親密感」や「一体感」を感じさせるが、他方では『『解釈』を受け入れさせよう」という「一方的」な態度ともなる。ノダが「やわらげ」と「押しつけ」・「強調」という正反対とも言うべきニュアンスを併せ持つのはそのためである。(名嶋：100)」と説明されている。

- (9) 「君が君ではなくなる。それだよ、ナカタさん。素敵だ。なんといつても、それが大事なことなんだ。(…)」(村上：(上)：314)

”Du er ikke længere dig selv. Det er *jo* det, Nakata. Vidunderligt. Det er meget vigtigt. (…)” (Holm: 148)

宮崎他(2002)によれば終助詞「ヨ」の機能・性質は以下のようにまとめられている。

「よ」は、その文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表す。基本的に聞き手に対して用いられ、聞き手が文の内容を認識するべきだと、話し手が考えていることが表される。(宮崎他：267)<sup>9</sup>

日本語の「ヨ」には「ネ」のように「聞き手の知識・意向を問う」というような「同意を形成する」機能はなく、どちらかと言えば、「聞き手に対して、話し手の発話する文の内容を認識せよ」という一方的なシグナルを送っているように思われる。したがってデンマーク語の *jo* の機能と「ヨ」の機能には、近接部分が存在せず、日本語の「ヨ」をデンマーク語の *jo* を用いて訳出することは適切ではないと思われる。

以上見てきたように、*jo* には「話し手が自身の発話内容について、聞き手がその内容に反論せず、同意してくれるだろうと思っていることを聞き手に伝える」機能があるが、様々な日本語表現に *jo* が対応させられていることを鑑みると、*jo* は「話し手がどの程度自身の発話内容に対して聞き手が反論せず、同意してくれるだろう、(あるいは同意しなければならない) と思っているのか」ということに対しては中立的な表現・形式であるように思われる。

最後に Holm では、村上で「根拠・前提」を表す文・節となっている箇所を、*jo* を含む文で訳している場合について言及しておきたい。

- (10) 「(…) 海の近くだから、高松のへんにもひとつくらいあるかもしれない」(村上 (下)：257)

”(…) Vi er *jo* nær havet, så mon ikke der er et akvarium et sted i Takamatsu.” (Holm: 339)

- (11) 「しかしここは図書館でありますから、ひとまず本を読もうかと思えます」

”(…) Men det er *jo* et bibliotek, så måske skulle vi starte med at læse i nogle bøger. (…)” (Holm: 367)

<sup>9</sup> 宮崎他(2002)においては「認識するべきだ」という表現における「認識する」ということが具体的にどのようなことであるかは言及されていないが、「同意する」や「受け入れる」という意味ではなく、「知る」あるいは「理解する」という意味で用いられていると思われる。

(10)–(11) では jo が先行する文で使われており、日本語文を参考にすると、その文が後続文の根拠・前提となっていることが分かる。ここで談話場面における情報の伝達という側面から考えてみたい。福地 (1985:129–132) によれば、前提となるような情報は旧情報としての性格をもつと考えられ、文の前方に現れることが情報の流れとしては効果的であるという。(10)–(11) においても「(高松が) 海の近くであること」、また「ここが図書館であること」という情報を、話し手は前提つまり旧情報として伝達し、後続する文を新情報として伝達していると考えられる。このような文脈において、デンマーク語訳に jo が使用されていることは、jo が「聞き手が発話内容について予め知っている」という場合に使われることが多いことと関連しているのではないかと思われる。<sup>10</sup>

### 3. da

Holm では、村上で終助詞「ヨ」が使われている文に対応させて da が用いられているものがある。先述した「ヨ」の機能・性質と、デンマーク語 da の「聞き手による先行発話の内容、第三者の見解あるいは潜在的な見解に反する内容を話し手が主張している」という機能には近似している部分があると言えるかもしれない。しかしながら日本語の「ヨ」には、デンマーク語の da が示すような「話し手の主張が聞き手にとって既知のものである」という意味は必ずしも含まれていない。以下の例を見てみよう。

(12) (ナカタ)「私たちはどこへ行くのでしょうか」(星野)「四国だよ。

橋を越えていくんだ。よう、これから四国にいくんだろう」(村上(上): 458) <sup>11</sup>

”Hvor skal vi hen?” ”Vi skal *da* til Shikoku, over broen. Var det ikke der, du ville hen?” (Holm: 213)

(12) はヒッチハイクをして四国へ向かうナカタとトラック運転手の星野の会話である。日本語の「四国だよ」という発話が意味するところは、上の「ヨ」の説明にしたがえば、話し手(星野)は「私たちは四国に行く」ということを聞き手(ナカタ)が認識するべきだと考えている、ということとなる。ではなぜ (12) のデンマーク語訳において da が用いられたのかについて

<sup>10</sup> GDS (2011: 1091) では、I 章 3.1.2. で言及したように、デンマーク語の jo には必ずしも「聞き手が発話内容について予め知っている」という意味は含まれない、と主張されているが、同時に「聞き手が発話内容について予め知っている」という場合に jo が使われることが多いことも認めている。

<sup>11</sup> 説明の便宜上、この例に関しては誰による発話かが分かるようにしている。以下和文の会話文前に ( ) 内で示される名前は筆者によるもの。

考えてみたい。(12)に先行する文脈ではこの2人はナカタさんが四国に向かおうとしていることについて予め会話をしている。<sup>12</sup>しかしナカタは「どこへ行くのか?」と尋ねることによって、間接的に星野に対して「自分がこれからどこへ行くのか分かっていない」ことを伝え、それに対して星野は「四国だよ」と答えることでナカタに「あなたがこれからどこへ行くのか分かっていないのはおかしい。先ほど四国に行くことについては話をした。だからあなたは私たちがこれから四国に行くことは分かっているはずだ」というように、daが使用できる文脈を読み取ることができる。つまり「ヨ」に対して自動的にdaが対応させられるのではなく、daが使われる場合には、文脈上その発話が聞き手の先行する発話に対して否定・反論として機能している必要があるということである。話し手が聞き手の先行する発話に対して否定・反論するという文脈でdaが使われているものには、以下のような例もある。

- (13) (大島)「兄がここまで送ってくれたんだね」(カフカ)「そうです」(大島)「あまりしゃべらなかつただろう」と大島さんは言う。(カフカ)「でも少しは話しました」と僕は言う。(村上(下):515)

”Hentede min bror dig?” ”Ja.” ”Han er ikke særlig snakkesalig, vel?” ”Vi snakkede *da* lidt,” svarer jeg. (Holm: 453-454)

(13)では「でも少しは話しました」という発話の「デモ」の部分に聞き手の先行する発話に対して否定・反論している様子が読み取れる。日本語の文ではそれ以上のことは読み取れない。しかしdaが使用されているデンマーク語文では、話し手(カフカ)が聞き手(大島)に対して「僕とあなたの兄は少しは話をした、そしてそのことは(何らかの理由で)あなたにも分かっていたはずだ」というニュアンスも加わることになる。ただ先行する文脈を見ても、聞き手である大島さんが自身の兄と主人公のカフカが何らかの会話を交わしたということを知っていることは読み取れない。(13)のような例が示すのは、daの機能の一部である「話し手による否定・反論の内容を聞き手が知っている」という部分はあくまで話し手の認識であり、実際問題として聞き手がその内容を既知と捉えているかどうかは別の問題である、ということに思われる。また次のような例もある。

- (14) (大島)「君はこれまで自分の戸籍を調べたことはある? (...)」(カフカ)「調べてみたよ、もちろん」(大島)「お母さんの名前はどんなになっていた?」(カフカ)「名前はなかった」と僕は言う。(…) (大島)「名前がない? そんなことはあり得ないはずだけだね」(村上(下):

<sup>12</sup> 「四国に行く」ことが話し手にとっても聞き手にとって定まった・既知のものであると、話し手が考えていることは、後続する「よう、これから四国にいくんだろう」という発話によっても分かる。



36-37)

”Har du set, hvordan du står opført i familieregisteret? (...)” ”Det har jeg selvfølgelig undersøgt.” ”Hvad hedder din mor så?” ”Der stod ikke noget navn,” siger jeg. (...) ”Stod der ikke noget navn? Det kan *da* ikke passe.” (Holm: 241)

(14) では話し手（大島）の「そんなことはあり得ないはずけどね」という発話の「ケド」の部分に聞き手（カフカ）の先行する発話内容（＝戸籍に母親の名前はなかった）に対して否定・反論している様子が読み取れる。<sup>13</sup> ただし *da* が使用されているデンマーク語文では、さらに話し手（大島）が聞き手（カフカ）に対して「戸籍に母親の名前がないことはあり得ない、そしてそのことは（何らかの理由で）あなたにも分かっていたはずだ」というニュアンスも加わることになる。先行する文脈にはカフカがその件について知っていたかどうかに関する記述はないが、「戸籍を見れば母親の名前が確認できることは一般的な知識としてカフカは知っているはずだ」と大島が考えているために *da* が使われていると考えることはできるかもしれない。

以下の例では第 I 章で確認した譲歩として機能する *da* が使われていると考えられる。

(15) (カフカ)「さくらさんの裸を想像していいですか?」(...) (さくら)「(...) そんなの黙って勝手に想像していればいいじゃない。(...)」(カフカ)「(...) 想像するって大事なことだという気がするし、いちおう断っておいたほうがいいように思ったから。(...)」(...) (さくら)「でもそう言われればたしかに、いちおうちょっと断ってもらったほうがいいような気がしなくもないな。(...)」(村上(上): 190-191)  
 ”Må jeg godt forestille mig, at du er nøgen?” (...) ”(...) Du kan jo bare gøre det uden at sige noget. (...)” ”(...) Fantasier betyder meget for mig, så jeg vil hellere bede om lov. (...)” (...) ”Og nu du siger det, så er det *da* meget rart, at du spørger først. (...)” (Holm: 92)

また「話し手の主観的な感情」を表す *da* としては、以下のような例があった。

(16) 「そりゃたいしたもんだ」と星野さんは感心した。(村上(上): 445)  
 ”Det var *da* ikke så dårligt!” udbrød Hoshino imponeret. (Holm: 207)  
 (17) 「たまげたね」(村上(下): 173) ”Det er *da* løgn!” (Holm: 301)

<sup>13</sup> 「そんなことはあり得ないはずけどね」の「ネ」については、大島の「そんなことはあり得ないはずけど」というカフカによる先行の発話内容に対する否定・反論について聞き手（カフカ）との間に同意形成を試みていると思われ、したがって *da* の意味とは関連していないものとする。

## 4. nu

ここでは Holm において nu が使われている例を参考に、日本語のどのような表現が nu に置き換えられているのかということに着目する。例えば Holm では、村上で「デモ」そして「ヨ」が使われている文に対応させて nu が用いられているものがある。

- (18) (カフカ)「(...) 電話会社の記録で僕が高松にいたことがわかってしまった。さくらさんの携帯の番号もね」(...) (さくら)「でもこっちの番号のことなら心配いらないよ。プリペイドだから、持ち主をたどりようがないんだ。もともとが彼氏のものだし、それを拝借してきたから、私の名前とも居場所とも結びつかないよ。だから安心していいよ」(村上(下): 104)

”(...) Det er derfor, at de har kunnet spore mig til Takamatsu. De har også dit telefonnummer.” (...) ”Det skal du **nu** ikke bekymre dig over. Jeg bruger telefonkort, så de kan ikke finde frem til mig. For øvrigt er det min kærestes telefon, jeg låner, så den kan hverken spores til mit navn eller min adresse. Slap du bare af.” (Holm: 271)

(18) は警察に居場所が分かってしまったカフカが、一晩泊めてもらったさくらに警察が彼女の携帯番号も手に入れていることを伝えている場面の一節であるが、聞き手(カフカ)の先行する発話から「彼がさくらの番号が警察に分かってしまったことを心配している」ことが読み取れる。そして話し手(さくら)の発話内の「デモ」から、先行する発話に対して否定・反論(「心配する必要はない」)している様子が、そして「ヨ」から話し手は自身の発話内容を聞き手が認識するべきだ、と考えていることが読み取れる。(18) のデンマーク語文において nu が用いられている背景を考えると、まず話し手は聞き手の先行する発話に対して否定・反論(=「番号のことは心配する必要はない」)していることが分かる。しかし da ではなく nu が用いられていることから、話し手はその否定・反論の内容は聞き手にとって未知のもの・新情報である、というニュアンスが加わることとなる。「番号のことは心配いらない」という話し手(さくら)の発話内容が聞き手(カフカ)にとって新情報であることは、(18) が置かれている文脈から考えても分かる。カフカはさくらの電話番号が警察に知れてしまったことを恐れてさくらに連絡しており、事前にカフカ自身が、番号が警察に知れてしまったことは心配する必要がないことが分かっていることは明らかだからである。また話し手の発話内容が聞き手にとって新情報であることは、その発話に後続する部分で「番号のことは心配する必要はない」ことの理由について話が進んでいくことから分かる。以上のような理由から、(18) のデンマーク語文では nu が使わ

れており、その使用も納得がいくものであると考えられる。

## 5. nok

Holm において nok が心態詞として用いられている文の中には、村上で「ダロウ」が使われているものがある。

(19) 「(...) ラジオのオールディーズ特集でもないかぎり、今ではまず聴く機会もないだろうから。(...)」(村上(上): 335)

”(...) I dag er der *nok* kun mulighed for at høre den i radioprogrammet *Gamle kendinge*. (...)” (Holm: 157)

第 I 章では、nok は「話し手の発話内容の真実性を保証するのは話し手のみであり、その発話内容は話し手の純粋な推量であるということを伝達する機能を持つ」と説明した。日本語の「ダロウ」と nok ではそれぞれの意味がどのように近接あるいは重なりあっているのだろうか。日本語の「ダロウ」については様々な方法での説明が試みられており、その全体像を把握するのは非常に難しいが、例えば宮崎(2012)は「ダロウ」のプロトタイプ的な意味を「推論・推量」とし、「ラシイ」が観察に基づく推論を表すのに対して、「ダロウ」は一般的知識に基づく推論を表すとしている。<sup>14</sup>

本章では宮崎(2012)にしたがい、日本語の「ダロウ」の基本的な意味を「推量」とし、デンマーク語の nok とは「推量」を表すという点に共通性があると考え、また vist が外的要因を根拠にした推量を表すのに対して、nok が話し手の純粋な推量を表すという対立も、「外的要因に基づく推量＝話し手にとって観察可能な(＝話し手の外部にある、外部にあると話し手が認識する)要因に基づく推量」および「話し手の純粋な推量＝一般的知識として話し手自身の主観に含まれる」と考えれば、宮崎の説明する「観察に基づく推論」(ラシイ)と「一般的知識に基づく推論」(ダロウ)という対立に近接する部分があると言えるかもしれない。

森山他(2000)および 宮崎他(2002)には「ダロウ」と近似した機能を持つ形式として「ト思ウ」について言及されている。<sup>15</sup> Holm において nok が使用されている箇所では、村上においてこの「ト思ウ」が使用されている場合もある。

<sup>14</sup> 他に田野村(2002)は「ダロウ」の第1の用法として、「話し手の推量、単純推量」を挙げており、また益岡(2007)は「ダロウ」の意味は「断定することを差し控えようとする(断定という形を取ることを回避しようとする)」「断定保留」である(益岡:183)」としている。

<sup>15</sup> とくに宮崎他(2002: 5-6)では、「ト思ウ」が「ダロウ」に近似する条件として、「ト思ウ」という形式で使われていることと、「ト思ウ」の前の引用文の述語が無標形式(＝助動詞などが何も付かない形式)であることが必要であると指摘されている。

- (20) 「(...) でも残念ながらその猫は見かけたことがない。べつの場所をあたってみた方がいいと思うね」(村上 (上) : 102)

” (...) Desværre er jeg ikke stødt på hende, så det er **nok** bedre at lede et andet sted.” (Holm: 50)

- (21) 「まだよくわからないけど、しばらくはここにいると思います。(...)」  
(村上 (上) : 121)

”Det ved jeg ikke endnu. Jeg bliver her **nok** i et stykke tid. (...)” (Holm: 59)

また森山他(2000)では「ダロウ」は推量を表しているのであって、その推量されている事態が実際に起こりうるかどうかという蓋然性の判断とは異なることも指摘されている。それゆえ森山他(2000)および宮崎他(2002)では「ダロウ」は「きっと」、「かならず」、「まちがいなく」、「たぶん」、「おそらく」、「もしかしたら」など様々な種類の確信度を表す副詞と共起することができる」とされている。デンマーク語 *nok* の表す確信度については、Jacobsen (1992: 15) において「*nok* はある特定の確信度を示さず、純粋な当て推量からよく熟慮された間違いない帰結までを網羅することができる」とされている。*nok* が持つこの柔軟な確信の度合いについては、Holm で *nok* が用いられている箇所と、村上における原文を比較することによっても確認できる。例えば以下の例においては *nok* は「タブン (...) ダロウ」という表現に対応していると考えられる。

- (22) タンスの上にだらしなく積みあげてある彼女のシャツに片端からアイロンをかけ、買い物をして今夜の夕食をつくりたいという気持ちになる。(...) しかしそこまでやるのはたぶんやりすぎだろう。(村上 (上) : 195)

Jeg har lyst til at stryge hendes bluser, som ligger i en rodet bunke på kommoden, og til at købe ind og lave aftensmad til hende. (...) men det er **nok** at overdrive, hvis jeg begynder at lave mad. (Holm: 94)

しかし以下の例では *nok* は、助動詞などが付かないいわゆる無標形式を訳す際にも用いられている。

- (23) 左肩のうずきをべつにすれば、痛みらしい痛みもない。だからそこについている血は君自身の血じゃない。(村上 (上) : 146)

Du har bare lidt ondt i venstre skulder, så det er **nok** ikke dit blod. (Holm: 71)

- (24) 大島さんは首を振る。「いや、そうじゃない。特殊ということでは、僕の方が特殊な人間だ。(...)」(村上 (上) : 225)

Oshima ryster på hovedet. ”Nej, hvis nogen er speciel, er det **nok** snarere mig. (...)” (Holm: 108)

宮崎他(2002:126-133)によれば、認識のモダリティにおいては、無標形式は「事実の確認」あるいは「確信的な判断」を表すという。いずれにしても話し手は当該文の命題内容は確実に事実と一致していると判断していると考えられる。したがって (23) そして (24) における *nok* はかなり高い度合いの確信度を表しているように思われる。

さらに以下の例では *nok* は「カモシレナイ」の訳としても使用されている。

(25) 「(...) 気に入らないかもしれないけど、とりあえず着てみて」(村上(上):182)

”(...) Det er *nok* ikke lige dig, men prøv den alligevel.” (Holm: 88)

(26) 「お礼を言うのはそこについてからでいいよ。君の予想しているものとはずいぶんちがうかもしれないから」(村上(上):226)

”Du må hellere vente med at sige tak, til vi er der. Det er *nok* ikke lige, hvad du regner med.” (Holm: 108)

「カモシレナイ」は、益岡(1991)や森山他(2000)では、当該文で示される事態が成立する確かさの度合い(蓋然性)を表す形式とされ、また「カモシレナイ」はその確かさの度合いが低いことを表すとされている。<sup>16</sup> 益岡(1991)および 森山他(2000)の説明にしたがえば、(25) および (26) に見られる *nok* は低い度合いの確信度を表していると考えられる。

以上見てきたように Holm においては *nok* が「ダロウ」、「ト思ウ」などの推量を表す形式から低い度合いの蓋然性・可能性を表す形式である「カモシレナイ」など様々な形式と対応させられていることが分かった。しかしながらデンマーク語の *nok* が実際にこれほど多様な確信度の度合いを持つのかどうかについては、今回の調査だけを根拠に判断するべきではないであろう。今後の課題としたいと考える。

## 6. vel

宮崎他(2002)および宮崎(2005)によれば、日本語には「確認要求」の機能をもつ形式が存在するという。確認要求の機能とは、「話し手の情報の捉え方が妥当であることの確認を聞き手に求める(宮崎他:203)」とある。また「確認要求」の機能を持つ形式としては、「ダロウ」、「ノデハナイカ」、「ネ」、「デハナイカ」、「ダロウネ」、「ヨネ」等が挙げられている。第I章では *vel* の心念詞としての機能を、「話し手の発話内容に関して聞き手の承認・支持を求めることを伝達する」というように説明したが、この *vel* の機能が日本語の「確

<sup>16</sup> ただし宮崎他(2002)には、「カモシレナイ」は「あくまでも、「可能性がある」という認識を表す形式であって、「可能性が低い」という認識を表すわけではない。(宮崎他:145)」という指摘もある。

認要求」の機能と近似しているようには考えられないだろうか。実際に Holm で *vel* が用いられている文を確認すると、村上の原文において日本語の「確認要求」の形式が使われているものがある。

- (27) (猫：オオツカ)「誰でも猫と話せるわけじゃないだろう」(ナカタ)  
「そのとおりであります」(猫：オオツカ)「じゃあ頭が悪いとは言えないだろう」(ナカタ)「はい、いいえ、つまり、そのへんのことはナカタにはよくわかりません。(…)」(村上(上)：97)

”Det er ikke alle og enhver, der kan tale med katte.” ”Det er så sandt, så sandt.” ”Så kan man *vel* ikke sige, at der er noget galt med dit hoved.” ”Nej, jo ... Nakata forstår det heller ikke selv. (…)” (Holm: 48)

(27) は、猫と話ができるナカタが実際に(便宜上オオツカと呼ばれている)猫と話をしている場面の会話である。2つ目の「ダロウ」を含む発話では、自身の知能が低いことについて話すナカタに対して、「猫と話せるのだから、あなたの頭が悪いとは言えない」という話し手(＝オオツカ)の認識が妥当であることの確認を聞き手(＝ナカタ)に求めていると考えられる。この状況の訳出として Holm において *vel* が使われているのは、納得がいくと思われる。以下に確認要求の形式が使われている例を2つ挙げる。

- (28) 「もちろん君はフランツ・カフカの作品をいくつか読んだことはあるんだろうね？」僕はうなずく。『城』と『審判』と『変身』と、それから不思議な処刑機械の出てくる話」(村上(上)：118)

”Så har du *vel* også læst bøger af Franz Kafka, ikke?” Jeg nikker. ”*Slottet, Processen, Forvandlingen* og så novellen om den underlige henrettelses-maskine.” (Holm: 58)

- (29) 「いずれにせよあなたは、あなたの仮説は、ずいぶん遠くの的を狙って石を投げている。そのことはわかっているわよね？」僕はうなずく。  
「わかっています。(…)」(村上(下)：142)

”Uanset hvad, så skyder du langt over målet med dine tanker, men det ved du *vel* godt?” Jeg nikker. ”Ja, det ved jeg godt, (…)” (Holm: 288)

(28) では「ダロウネ」そして (29) では「ヨネ」が用いられているが、宮崎他(2002: 221)によれば、「ダロウネ」と「ヨネ」は、(27) で見た「ダロウ」とは意味合いが異なるとされている。「ダロウネ」・「ヨネ」が使われる場合には、話し手が聞き手に確認を要求しているのは、話し手が「こうでなければならない、こうあるべきだ」と思っている話し手の判断と事実が合致しているのかどうか、ということであるという。日本語のこのような微妙な差異はしたがってデンマーク語では言語形式として表すことができないということになるであろうか。

## 7. vist

Holm において vist が心態詞として用いられている文の中には、村上で「ヨウダ」、「ミタイダ」、「ラシイ」そして「ソウダ」が使われているものがある。

- (30) 父は母の写っている写真を一枚残らず捨ててしまったようだった。  
(村上 (上) : 16)

Far har **vist** smidt alle billeder af hende væk. (Holm: 10)

- (31) 「ずいぶんぐっすり眠っていたみたい」と彼女は言う。(村上 (下) : 426)

”Du har **vist** sovet rigtig godt,” siger hun, (Holm: 414)

- (32) 「そして新聞には、東名高速道路の富士川サービスエリアで、同じ日の深夜に大量のヒルが空から降ってきたという記事が載っていた。  
(...) かなり大きなヒルだったらしい。」(村上 (上) : 424-425)

”Et andet sted i avisen står der, at der faldt igler ned fra himlen sent samme aften ved en rasteplads ved Fujigawa, (...). Iglerne var **vist** ret store. (...)”  
(Holm: 198)

- (33) 「(...) 口もうまくきけなかったそうです。(...)」(村上 (上) : 164)

”(...) Hun havde **vist** ikke rigtig lært at tale. (...)” (Holm: 80)

宮崎他(2002)では、「ヨウダ」、「ミタイダ」、「ラシイ」、「(シ) ソウダ」、「(スル) ソウダ」などの形式は「証拠性」に関わる意味を持つ、つまり「話し手が何らかの証拠—話し手自身の観察や他者からの情報など—に基づいて当該事態を認識していることを表すという性質を共有している（宮崎他：152-153）」と説明されている。第I章で確認したように、vist は話し手による発話内容の真実性が話し手自身の判断ではなく、別の要因が根拠、つまり何らかの証拠があることを表すのであるから、(30) - (33) において vist を用いたデンマーク語文に訳されているのは非常に納得がいく。

ただ Holm においては、村上で「ヨウダ」や「ラシイ」のような、「証拠性」を表す決まった言語形式が用いられていない場合にも、vist が用いられている例がある。

- (34) リュックを肩に背負い、灌木を乗り越えたりかきわけたりしながら、少し開けた場所に出る。そこには狭い通り道がある。懐中電灯の光をあてながらその道をたどっていくとやがて明かりが見え、神社の境内らしきところに出る。神社の本殿の裏側にある小さな林の中で、僕は意識を失っていたのだ。けっこう広い神社だ。(村上 (上) : 143)

Jeg tager rygsækken på og baner mig vej gennem buskadset ud til et åbent område, hvor der er en smal sti. I lyset fra lommelygten følger jeg stien, og snart kan jeg se lys og når frem til noget, der ligner en shintohelligdom. Jeg

er altså besvimet i krattet bag hovedbygningen til en shintohelligdom. Det er **vist** en ret stor helligdom. (Holm: 70)

「けっこう広い神社だ」という原文自体には、vist の使用を促すような言語形式は現れていないように思われるが、先行する文脈を確認すると、とある場所で意識を失ってしまった主人公が自身の今いる場所を周囲の様子から判断しようとしていることが明らかである。つまり「けっこう広い神社だ」という発言は、主人公がその場で収集した外界の状況に関する情報を踏まえた上での発言だと考えることもできる。その場合にデンマーク語訳において vist が用いられるのは納得がいくと思われる。

次に Holm で vist が使用され、日本語で村上で「ハズダ」と表されている例を見てみよう。

- (35) 「その答えはあなたにはもうわかっているはずよ」と佐伯さんは言う。  
(村上 (下) : 470)

”Du kender **vist** allerede svaret på det spørgsmål,” siger hun. (Holm: 434)

- (36) 「(...) 移動しているあいだはたぶんそんなに危険じゃないはずだ」と猫は行った。(村上 (下) : 488)

”Det er **vist** ikke så farligt, når det bevæger sig,” sagde katten. (Holm: 442)

宮崎他 (2002) によれば、「ハズダ」は、「ニチガイナイ」や「ニキマッティル」と共に、必然性の認識を表す形式の 1 つとされ、上で見た証拠性を表す「ヨウダ」や「ラシイ」とは異なるグループに属している。<sup>17</sup> ただし「ニチガイナイ」の文が「根拠に基づいて推論すれば、～と確信される」というのに対して、「ハズダ」の文は「道理や法則、常識に従えば、当然、～ということになる」というように話し手がある事柄の成立を当然視していることを表すという (宮崎他 : 151)。いずれの場合にしても「話し手自身の主観的な判断」ではなく、「何らかの根拠・理由に従っての判断」を表しているということが言えよう。したがって (35) そして (36) において vist が用いられている理由としては、「ハズダ」という形式から、その発話で示される推論が、話し手の主観的な判断に基づくものではなく、第三者的な要因が根拠になっていると理解され、vist が用いられているというように考えることが出来るかもしれない。

<sup>17</sup> 益岡 (1991) では、「ハズダ」は「ヨウダ」や「ラシイ」と同じグループに分けられている。



## 8. altså

次に Holm において altså が使われている例を見ていこう。

- (37) (佐伯)「あなたは今なにを考えているの？」と佐伯さんは僕に尋ねる。(カフカ)「スペインに行くこと」と僕は言う。(佐伯)「スペインに行ってなにをするの？」(カフカ)「おいしいパエリアを食べる」(佐伯)「それだけ？」(カフカ)「スペイン戦争に参加する」(佐伯)「スペイン戦争は 60 年以上前に終わったわよ」(村上 (下) : 153)

”Hvad tænker du på lige nu?” spørger fru Saeki. ”På at rejse til Spanien,” svarer jeg. ”Hvad vil du lave i Spanien?” ”Spise lækker paella.” ”Og ikke andet?” ”Deltage i Den spanske borgerkrig.” ”Den spanske borgerkrig sluttede *altså* for tres år siden.” (Holm: 292)

(37) では、「スペイン戦争に参加しにスペインに行きたい」と言うカフカに対して、佐伯は「スペイン戦争はもう終わっている」という事実を伝える発話によって、間接的に聞き手(カフカ)にその計画には無理があることを伝えていと考えられる。<sup>18</sup> この会話の流れは、第 I 章で確認した altså が「話し手が自身の発話によって聞き手の計画の変更を促そうとしている」という心態詞的な意味で用いられる文脈と明らかに類似していると考えられ、デンマーク語文に altså が使用されていることにも納得がいく。次の例も同様である。

- (38) 「こんにちは」とナカタさんはその暗い輪郭に向かって声をかけた。相手は無言だった。「ナカタともうします。お邪魔いたします。あやしいものではありません」(村上 (上) : 261)

”Goddag”, sagde Nakata hen mod den mørke kontur. Skikkelsen svarede ikke. ”En hedder Nakata og undskylder meget forstyrrelsen. En er *altså* ingen indbrudstyv.” (Holm: 125)

(38) では、挨拶をしても何も返答がない相手に対して、ナカタが「自分はあやしいものではない」ことを伝える発話によって、間接的に相手が応答するように促していると考えられる。ある特定の日本語が altså に訳出されているわけではないが、デンマーク語文において altså が用いられることで「自分はあやしいものではない」という発話がどのような意図を持って発話されているかがより明確になっていると言えるであろう。(37) と (38) では、altså が聞き手に対して聞き手が予定・意図している行動とは別の行動をとらせるように促していることを伝える役割をしていると考えられるが、以下の 2 例

<sup>18</sup> 日本語文の「ヨ」によっても話し手(佐伯)が「スペイン戦争はもう終わっている」ということを聞き手(カフカ)は認識するべきだ、と考えていることが分かる。

では日本語を参考にすると *altså* を含む文に別の効果があるように思われる。

- (39) 大島さんは少し間をおいて言う、「しかし、そうだな、今夜から急にここに寝泊まりするというのはいくらなんでも無理かもしれない。だから君をとりあえず別の場所に連れて行くことにする。君は話のつくまで、たぶん 2、3 日、そこに滞在していればいい。それでかまわないかな？少しここから離れたところなんだけれど」(村上(上): 226)
- Det varer lidt, før Oshima fortsætter. ”Du kan bare ikke overnatte her allerede i aften, men jeg kan køre dig et andet sted hen, hvor du kan bo to-tre dage, indtil jeg har fået afklaret situationen. Hvad siger du til det? Det ligger *altså* et godt stykke herfra.” (Holm: 108)

(39) の文脈は、泊まるところがなくて困っている主人公に対して、大島さんは彼の働いている図書館に泊まってもいいと言うが、それも今すぐにといいわけにはいかないので、とりあえず 2、3 日は別の場所を提供するというものである。*altså* が使われている文では、話し手である大島さんは、「その別の場所は主人公と大島さんが今いる図書館から離れている」ことを伝えている。しかし大島さんはそのことによって主人公に別の選択肢を選ぶことを促しているのではなく、「その場所が現在主人公がいる場所から離れている」という事実によって聞き手である主人公が「その場所に行く」ということを止めるあるいは躊躇うことがあっても構わない、ということを伝え、聞き手に選択の猶予を与えているように思われる。以下の例も同じタイプのものである。

- (40) 「もしおなががすいたら、冷蔵庫の中にあるものをなんでも食べればいい。たいしたものはないけどな」とがっしりしたほうが言う。(村上(下): 418)

”Hvis du bliver sulten, er du velkommen til at tage mad i køleskabet, men der er *altså* ikke noget særligt,” siger den lille tætte. (Holm: 411)

(40) では、話し手は「冷蔵庫にはたいしたものはない」という事実を伝えることで聞き手に「おなががすいたら、冷蔵庫の中にあるものを食べる」とことは別のことをするように促しているのではない。そうではなくて、「冷蔵庫にたいしたものはない」ことを伝えることで、聞き手が「冷蔵庫にあるものを食べる」ことを選ばない場合があっても構わない、というように、聞き手に行動選択の猶予を与えているように思われる。(39) や (40) のデンマーク語訳における *altså* の使用には、従来の「聞き手に予定とは別の行動を促す」といった話し手の心的態度を表す機能から派生して、「聞き手に予定とは別の行動を選択する余地を与える」という効果があるように思われる。

第 I 章でも確認したように、*altså* には心態詞として「話し手の主観的感情

を表す機能」もある。最後に *altså* が「話し手の主観的感情」を表していると考えられる例を挙げておく。

- (41) 大島さんはそれを聞いて驚いたようだった。「名前がない？そんなことはあり得ないはずだけどね」「でもなかったんだ。本当に。どうしてないのか、僕にもわからない。(…)」(村上(下)：37)

Oshima ser undrende på mig. ”Stod der ikke noget navn? Det kan da ikke passe.” ”Det gjorde der *altså* ikke! Jeg er helt sikker, og jeg forstår heller ikke, hvordan det kan lade sig gøre. (…)” (Holm: 241)

## 9. *ellers*

次に Holm において *ellers* が使われている例を見ていこう。

- (42) (星野)「(…) 警察が俺たちのことを探している」(ナカタ)「そうありますか」(星野)「そういう話だった。でも、ジョニー・ウォーカーさんとのあいだに、いったいに何があったんだい？」(ナカタ)「ええと、ホシノさんにそのことは申し上げませんでしたっけ？」(星野)「いや、申し上げてないね」(ナカタ)「申し上げたような気がしていたのですが」(村上(下)：247-248)

”(…) Politiet leder efter os.” ”Er det sandt?” ”Ja, det er jeg blevet fortalt. Men hvad er det med dig og ham der Johnnie Walker?” ”Har Nakata ikke sagt det?” ”Nej, det har du ikke.” ”Det mener en *ellers* at have gjort.” (Holm: 335)

(42) では、聞き手(星野)の発話内容「ナカタさんはジョニー・ウォーカーさんとあいだにあったことを、星野さんに伝えていない」に対して、話し手(ナカタ)はその逆、つまり「そのことについて聞き手(星野)に予め伝えていた」という認識を持っていることは先行の会話からも明らかであるし、「申し上げたような気がしていたのですが」の最後「ガ」によっても話し手が聞き手の認識とは別の認識を持っていることが分かる。このような文脈においてデンマーク語文で *ellers* が用いられるのは納得がいくと思われる。

## 10. *dog*

第 I 章で確認した「主観的感情を表す」*dog* は Holm においても使用されている。

- (43) 「(…) 本が読めるのはこんなに素晴らしいことなのかと思っております。(…)」(村上(下)：285)

”(…) Hvor er det *dog* fantastisk at læse. (…)” (Holm: 352)

(44) 「ナカタさんってどうしてそんなに猫の習性や考え方がよくわかるのかしら。(…)」(村上(上): 248)

”Det var *dog* utroligt så godt, du forstår dig på katte, (…)” (Holm: 119)

## 11. まとめ

本章では、村上春樹作『海辺のカフカ』とそのデンマーク語版 *Kafka på stranden* から例文を集め、デンマーク語の心態詞がどのような日本語の表現形式に対応しているのかを考察してきた。結果としてデンマーク語の心態詞がある一定の日本語の表現形式に常に対応しているわけではないことが分かり、改めてデンマーク語の心態詞と日本語の様々な表現との関係性を精査していく必要があるように思われた。しかしながら日本語文法および日本語のモダリティの表現形式が非常に複雑かつ多岐にわたっており、筆者の知識不足のために説明に窮した例も非常に多くあった。さらに今回は複数の心態詞を一度に扱ったため、議論が尽くされていない点も多々ある。またデンマーク語の心態詞についての記述をするにあたり、今一度どこまでが意味論的範疇に入ると考えられるのか、またどこからが語用論的な効果と考えられるのかという点に関しての議論も必要であることを再認識した。今回の調査によって浮き彫りになった不明点なども含め、今後の課題としたいと考える。

(2014. 09. 29)

## Studier over modalpartiklerne i dansk

Rie Obe, Toshihiro Shintani og Martin Paludan-Müller

### Resumé

Vi fremlægger i denne artikel nogle studier over modalpartiklerne i dansk.

I kapitel I giver Rie Obe et overblik over forskningshistorien omkring de danske modalpartikler fra Peter Harder (1975), Torben Andersen (1982), Niels Davidsen-Nielsen (1993), Eva Skafte Jensen (2000), Toshihiro Shintani (2001, 2007) og op til Erik Hansen og Lars Heltoft (2011) og skitserer funktionerne og betydningerne af nogle repræsentative modalpartikler som *sgu*, *jo*, *skam*, *da*, *nu*, *nok*, *vel*, *vist*, *altså*, *ellers* og *dog* ved at give eksempelsætninger med deres japanske oversættelser.

I kapitel II viser vi yderligere nogle eksempelsætninger med *da* og *nu* hentet fra et lærebogssystem i dansk og en dansk roman, analyseret med nøje fortolkninger af vores danske lektor, Martin Paludan-Müller, som er uddannet i filosofi, sproglig rådgivning og dansk litteratur.

I kapitel III studerer Toshihiro Shintani hvordan danske modalpartikler samt det konnektive adverbium *også/heller* og fokuspartiklen *godt* forstås af japanere der forsker i, studerer eller lærer dansk – eller hvorvidt modalpartiklerne samt *også/heller* og *godt* overhovedet bliver forstået af japanere. Det sker ved nøje at iagttage hvorledes modalpartiklerne i Helle Helles roman *Ned til hundene* er gengivet i to japanske oversættelser. Det viser sig så at det næppe kan siges at japanere forstår modalpartiklerne eller *også/heller* og *godt*. Det understreger nødvendigheden af at udgive en ordentlig dansk-japansk ordbog der nøje forklarer modalpartikler, og/eller en bog om danske adverbier, herunder diverse partikler.

I kapitel IV studerer Rie Obe hvordan modalpartikler er anvendt i en dansk oversættelse af en japansk roman. Kapitlet er baseret på resultater af hendes undersøgelse om i hvilke situationer modalpartikler forekommer i en dansk

oversættelse, *Kafka på stranden* (『海辺のカフカ』) af Haruki Murakami. Af hendes undersøgelse fremgår det blandt andet at de danske modalpartikler *jo*, *da* og *nu* er anvendt som oversættelse af en række japanske partikler der kaldes ”shu-joshi” på japansk, og som altid står i slutningen af en sætning. *Nok*, *vel* og *vist* er brugt som oversættelse af en række japanske hjælpeverber der betegner den talendes manglende sikkerhed om det sagte som har forskellige årsager. Hvad angår *altså* og *ellers*, er der kun få eksempler brugt som modalpartikler i *Kafka på stranden*. Dog er deres anvendelse i oversættelsen passende når sammenhængen i originalen tages i betragtning.

### 参 考 文 献

- Allan, Robin, Philip Holmes and Tom Lundskær-Nielsen. 1995. *Danish. A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Andersen, Torben. 1982. “Modalpartikler og deres funktion i dansk”, *Danske Studier* 1982, 86-95. København: Akademisk Forlag.
- Davidsen-Nielsen, Niels. 1993. “Det er sgu da nu vist en misforståelse”, *Nyt fra Sprognævnet* 1993/3. 1-8, København: Dansk Sprognævn.
- GDS → Hansen, Erik og Lars Heltoft. 2011.
- Hansen, Erik og Lars Heltoft. 2011. *Grammatik over det Danske Sprog I-III*. Odense: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. Syddansk Universitetsforlag. (GDS と略す)
- Harder, Peter. 1975. Prædikatsstruktur og kommunikativ funktion. *Nys* 8. København: Københavns Universitet.
- Jacobsen, Henrik Galberg. 1992. Vist og nok. Om et par formodningsord i dansk. *Mål & Måle*. 2/15. årgang. København: Københavns Universitet.
- Jensen, Eva Skafte. 2000 (upubliceret). *DANSKE SÆTNINGSADVERBIALER OG TOPOLOGI I DIAKRON BELYSNING*. Ph.d.-afhandling i dansk grammatik ved Institut for Nordisk Filologi, KU.

岩崎英二郎編. 1998. 『ドイツ語副詞辞典』. 東京：白水社.

新谷俊裕. 2001. 「デンマーク語の副詞 *ellers* の意味と用法」, *IDUN* Vol. 14, 19-62.

- . 2007. 「デンマーク語の副詞 *altså* の心態詞的用法について」, *IDUN* Vol. 17, 21-46.
- 新谷俊裕・Thomas Breck Pedersen・大辺理恵. 2014. 『大阪大学外国語学部 世界の言語シリーズ 10 デンマーク語』. 大阪：大阪大学出版会.
- 田野村忠温. 2002. 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』. 大阪：和泉書院.
- 名嶋義直. 2007. 『ノダの意味・機能 関連性理論の視点から』（日本語研究叢書 19）. 東京：くろしお出版.
- 野田春美. 1997. 『「の（だ）」の機能』（日本語研究叢書 9）. 東京：くろしお出版.
- 福地 肇. 1985. 『談話の構造』（新英文法選書第 10 巻）. 東京：大修館書店.
- 益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』. 東京：くろしお出版.
- . 2007. 『日本語モダリティ探究』. 東京：くろしお出版.
- 宮崎和人. 2005. 『ひつじ研究叢書（言語編）第 36 巻 現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』. 東京：ひつじ書房.
- . 2012. 「認識的モダリティの意味と談話的機能」. 『ひつじ意味論講座 4 モダリティ II：事例研究』（澤田治美編）. 東京：ひつじ書房.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃. 2002. 『新日本語文法選書 4 モダリティ』. 東京：くろしお出版.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩. 2000. 『日本語の文法 3 モダリティ』. 東京：岩波書店.

## 辞 書

- DER = Axelsen, Jens. 1995. *Dansk-engelsk ordbog*. 10. udg. (Gyldendals røde ordbøger) København: Gyldendal.
- DDO = Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 2003-2005. *Den Danske Ordbog*. Bind 1- Bind 6. København: Gyldendal.
- DES = Vinterberg, Hermann & C. A. Bodelsen. 1990. *Dansk-engelsk ordbog*. 3. udg. ved Viggo Hjørnager Pedersen. (Gyldendals store ordbøger) København: Gyldendal.
- DTR = Bork, Egon. 1987. *Dansk-tysk ordbog*. 9. udg. (Gyldendals røde ordbøger) København: Gyldendal.
- DTS = Bergstrøm-Nielsen, Henrik, Henrik Lange & Henry Verner Larsen. 1991. *Dansk-tysk ordbog*. (Munksgaards store ordbøger) København: Munksgaard.
- 新谷俊裕. 2010. 「3. 語彙集」, 新谷俊裕・大辺理恵『高度外国語教育全国配

- 信システムプロジェクト デンマーク語独習コンテンツ』. 大阪：大阪大学 世界言語研究センター. <http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/dan/pdf/all.pdf>
- 新谷俊裕・間瀬英夫. 2003. 『音声記号習得および音声記号読み替え練習のための デンマーク語基礎語彙集 — Molbæk Hansen 方式から改良 Dania 式発音記号へ —』. 大阪：大阪外国語大学. (同改訂版. 2008. 『デンマーク語初級教科書 *Lær dansk* 音声表記付語彙集』. 大阪：大阪大学 世界言語研究センター ヨーロッパ・アメリカ言語文化圏研究部門 I 新谷俊裕 デンマーク語研究室.
- <http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/danish/dictionary/ordliste.pdf>)
- 梅棹忠夫ほか編. 1995 (1987). 『講談社カラー版 日本語大辞典』. 第二版. 東京：講談社.
- 古城健志・松下正三編著. 1993. 『デンマーク語辞典』. 東京：大学書林.
- 森田貞雄監修. 2011. 『現代デンマーク語辞典』. 東京：大学書林.
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』. 東京：角川書店.

## テキスト

- DK = Jeppesen, Bodil og Grethe Maribo. 2011 (2001). *DET KOMMER! Dansk som andetsprog på mellemtrin, grundbog*. København: Alfabeta. og 2011 (2001). *DET KOMMER! Dansk som andetsprog på mellemtrin, lærervejledning*. København: Alfabeta.
- H = Helle, Helle. 2011 (2008). *Ned til hundene*. 3. udgave. København: Samleren.
- Holm = Haruki Murakami (oversat af Mette Holm). 2005. *Kafka på stranden*. Århus: Forlaget Klim.
- 村上=村上春樹. 2010 (2002). 『海辺のカフカ (上)・(下)』. 東京：新潮社.
- N = ヘレ・ヘレ. 野澤みどり訳. 2013. 『犬のところにへ』. 埼玉：ミリンド出版.
- W = ヘレ・ヘレ. 渡辺洋美訳. 2014. 『犬に墜ちても』. 東京：筑摩書房.